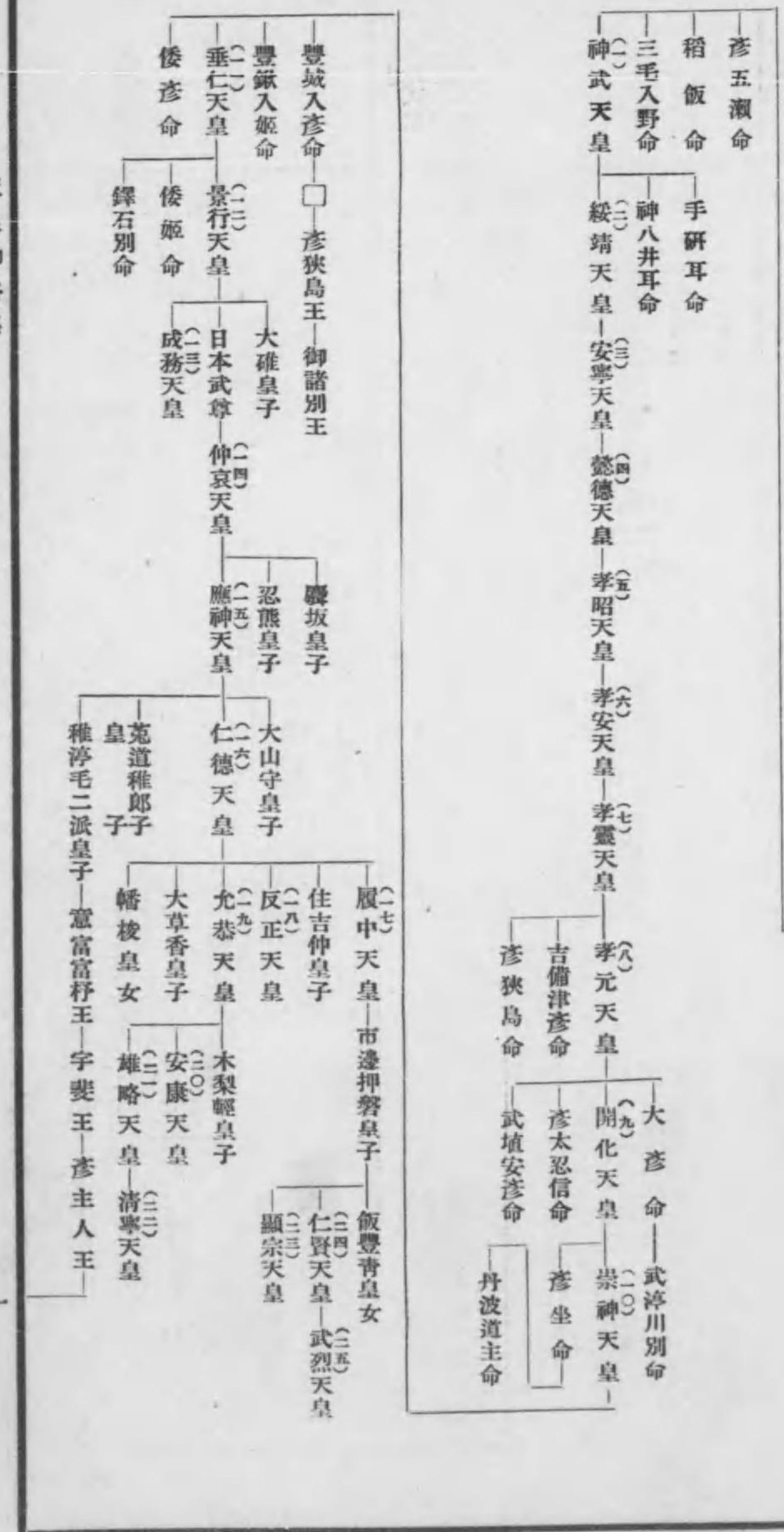


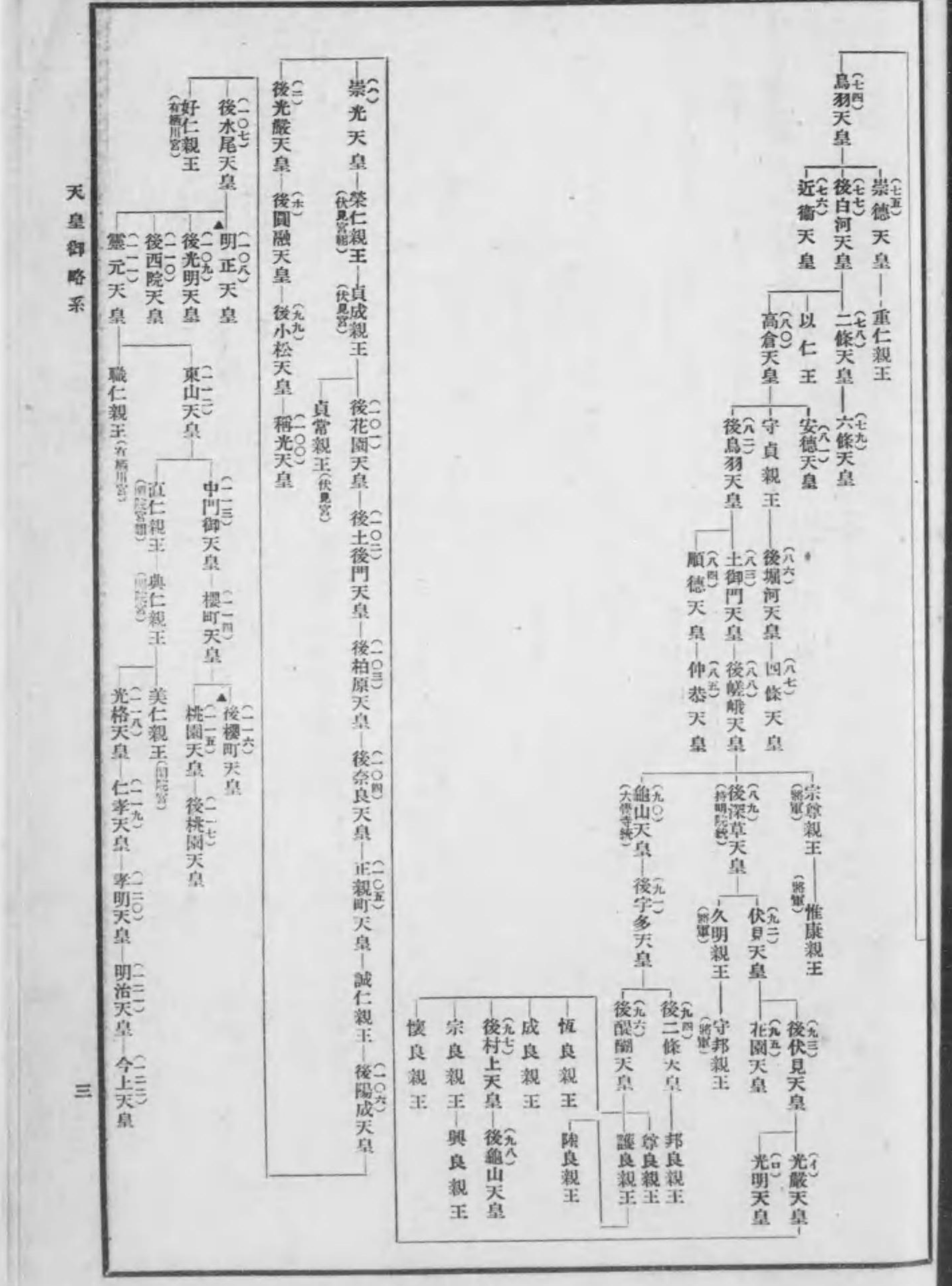
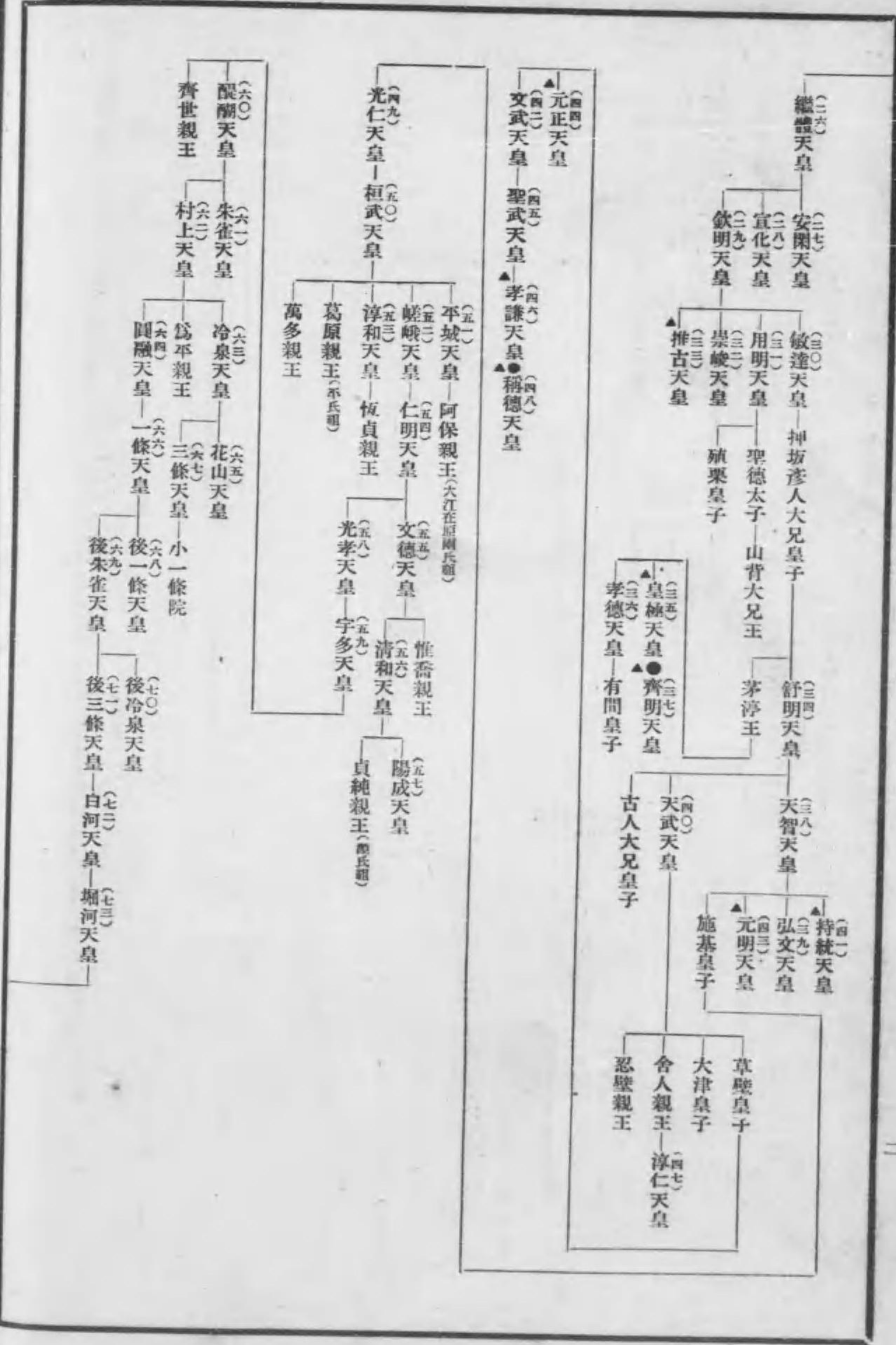
家 茂 (二五一八)	慶 喜 (二五二六)	慶 喜 (二五二七)	明 治 (二五二七 - 二五七三)
二五一九 安政六 元	二五二〇 萬延元 元	二五二二 文久元 元	二五二二 同 元
二五二一 同 元	二五二二 同 元	二五二三 同 元	二五二四 元治元 元
二五二五 慶應元 元	二五二六 同 元	二五二七 慶應三 元	二五二七 慶應三 元
一八五九 露爾佛英米に神奈川長崎函館にての貿易を令す○安島帶刀橋本左内吉田松陰等刑せらる○三條實萬薙す(年五八)	一八六〇 安藤信正老中となる○始めて使節を西洋に遣はす○水戸浪士井伊直弼を櫻田門外に要撃す○葡國と和親條約を結ぶ○齊昭薙す(年六一)○慶喜春嶽容堂等の謹慎を解く○普國と條約を締結す	一八六一 水戸浪士下野足利を亂す○飯田忠彦自刃す(年六三)○水戸浪士高輪東禪寺に英人を傷く○外國公使館を品川御殿山に設く○和宮將軍に降嫁○再び使節を西洋に遣はす	一八六二 浪士安藤信正を坂下門に傷く○鳥津久光入京す○寺田屋の變○勅使大原重徳東下す○一橋慶喜後見に松平春嶽總裁職に各任す○生夢の變○參勤交代を緩む○蘭國へ留學生を派す○勅使三條實美東下す○大橋順藏薙す(年四七)
一八六三 英人生麥事件の償金を要求す○將軍入京○賀茂行幸石清水行幸○攘夷期を五月十日と定む○長藩外船砲撃○英人鹿兒島に入寇○攘夷親征の議○大和の變○三條實美等の脱走○生野の變○瑞西と條約を結ぶ	一八六四 幕府水戸藩等へ勅諭下る○松平定敬京都所司代となる○池田屋の變○水藩武田耕雲齋等の擧兵○佐久間象山殺さる(年五四)○蛤御門の變○幕府長州征伐を令す○長藩英佛米蘭聯合軍と戦ふ○長藩外國聯合軍と講和す○橫須賀造船所設置	一八六五 長藩高杉晋作の擧兵○武田耕雲齋等斬らる○長州再征の部署を定む○英國留學生差遣○將軍大坂城に入る○假條約勅許兵庫開港許されず	一八六六 高島秋帆薙す(年六九)○毛利敬親父子に贊唐制封を命ず○幕軍長藩に逼りて連戦連敗す○伊白兩國と條約を結ぶ○將軍家茂薙す(年二一)○勅により征長軍停止○慶喜將軍に任ず○丁國と條約を結ぶ○十二月二十五日天皇崩す(壽三六)
一八六七 明治天皇踐祚○勅により征長軍を解く○高杉晋作薙す(年二九)○兵庫開港○關谷宿陰薙す(年五九)○山内豐信(容堂)大政奉還を將軍に勸告す○討幕の密勅下る○慶喜大政を奉還す○十二月王政復古の大号令る○攝政關白征夷大將軍等の職を廢し新に總裁議定參與の三職を設け親王公卿諸侯諸藩士の中より登庸す	一八六七	一八六七	一八六七

### 天皇御略系

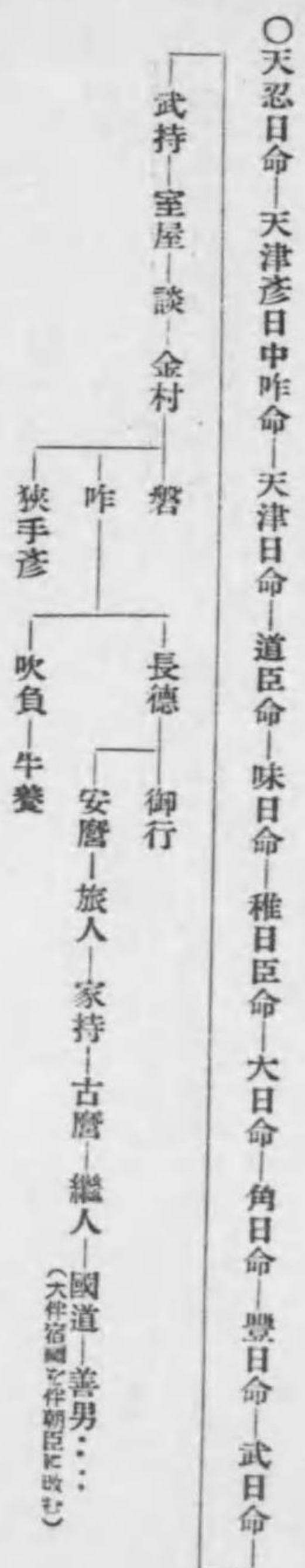
○天照大神—天忍穗耳尊—天津彦彦火瓊瓊杵尊—彦火火出見尊—彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊—

(括弧中の數字は御代數、▲符は女天皇) 符は天皇重祚、北朝世次はイロハ順

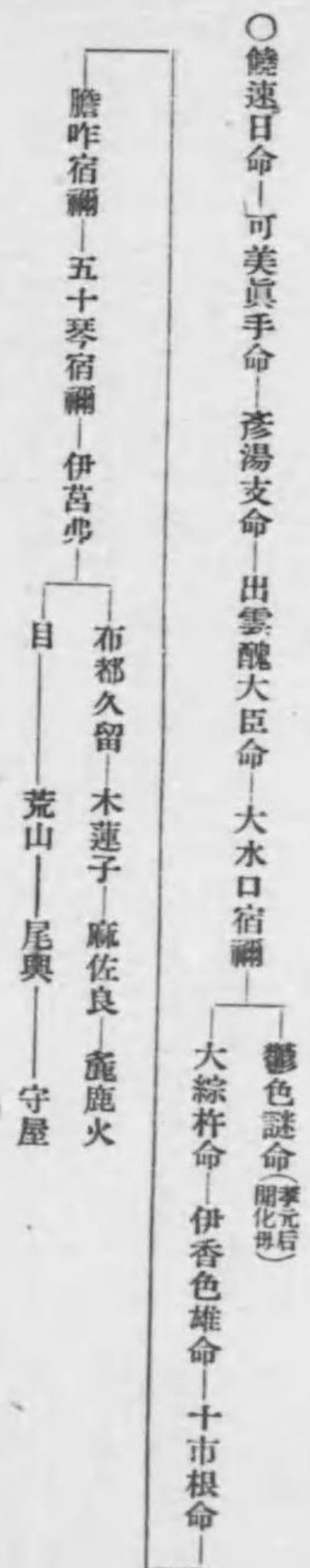




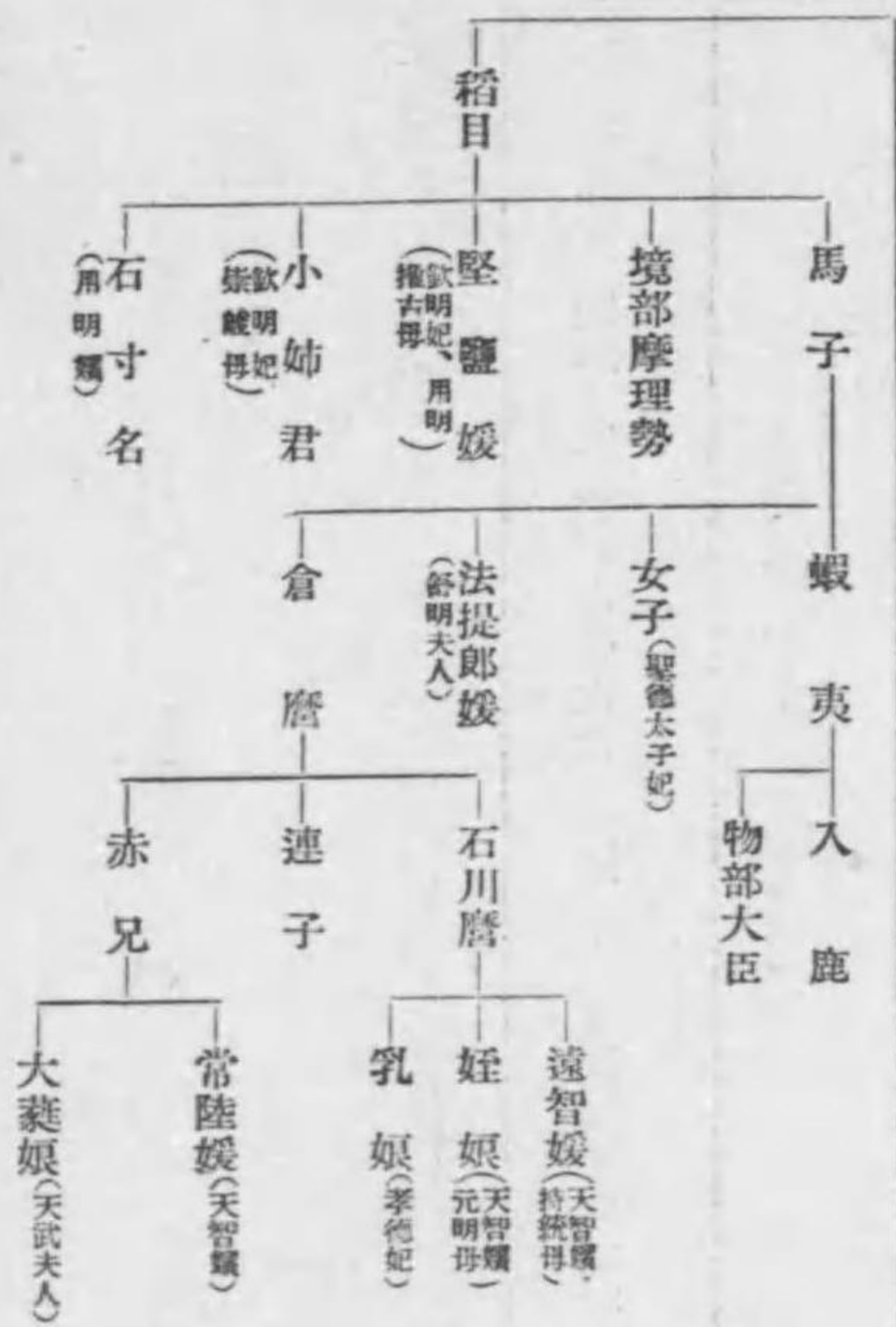
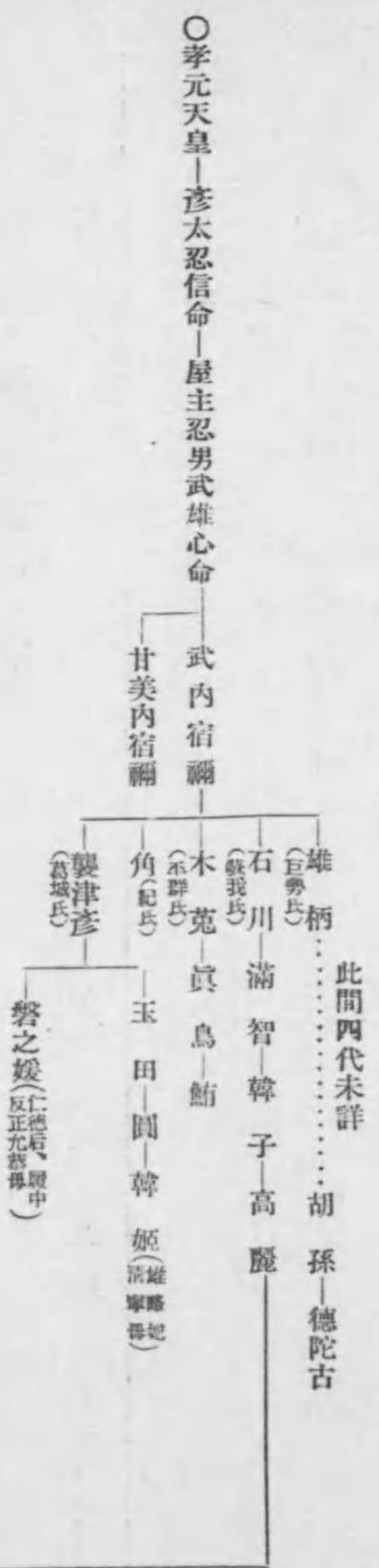
### 大伴氏



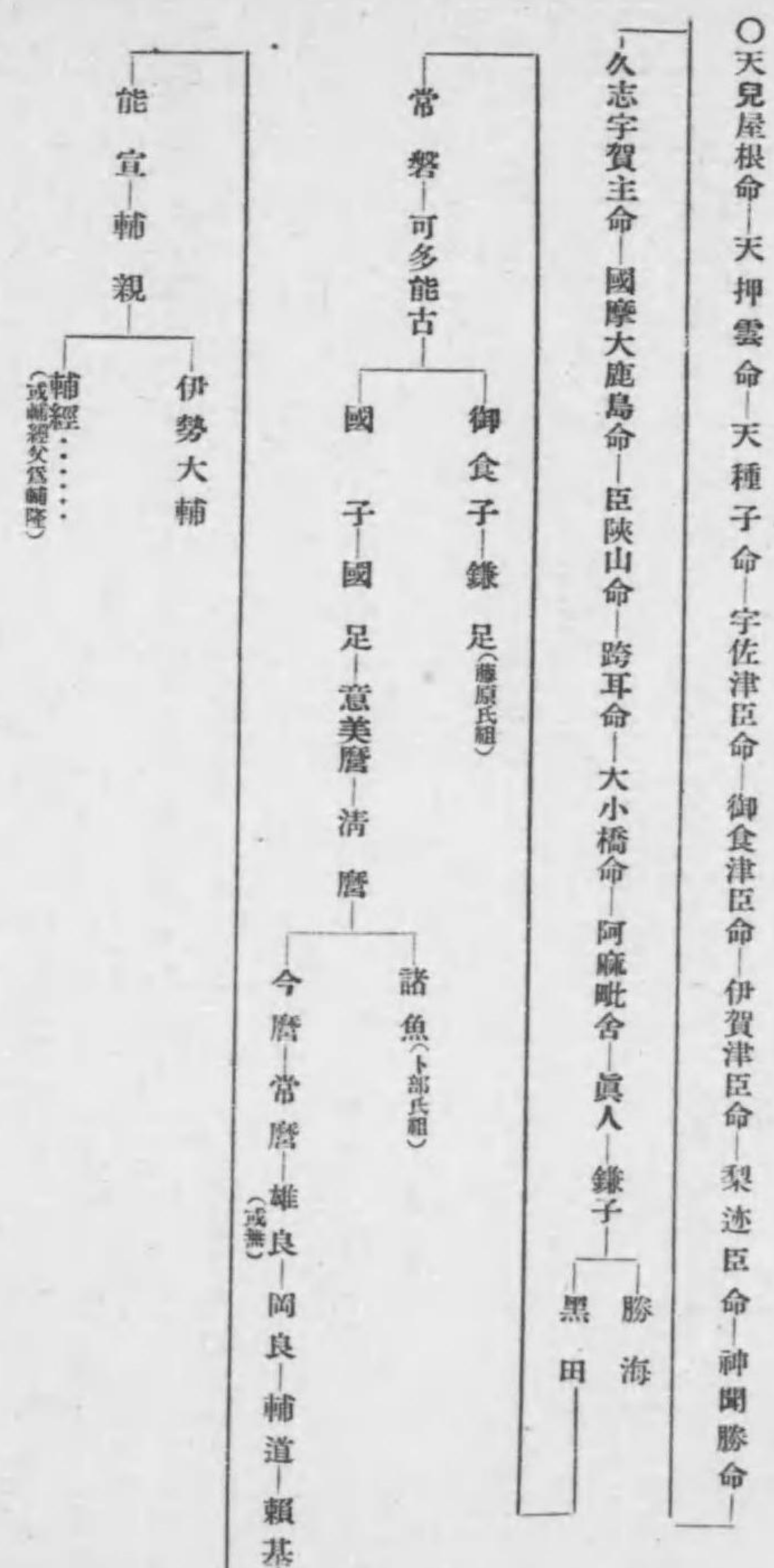
### 物部氏



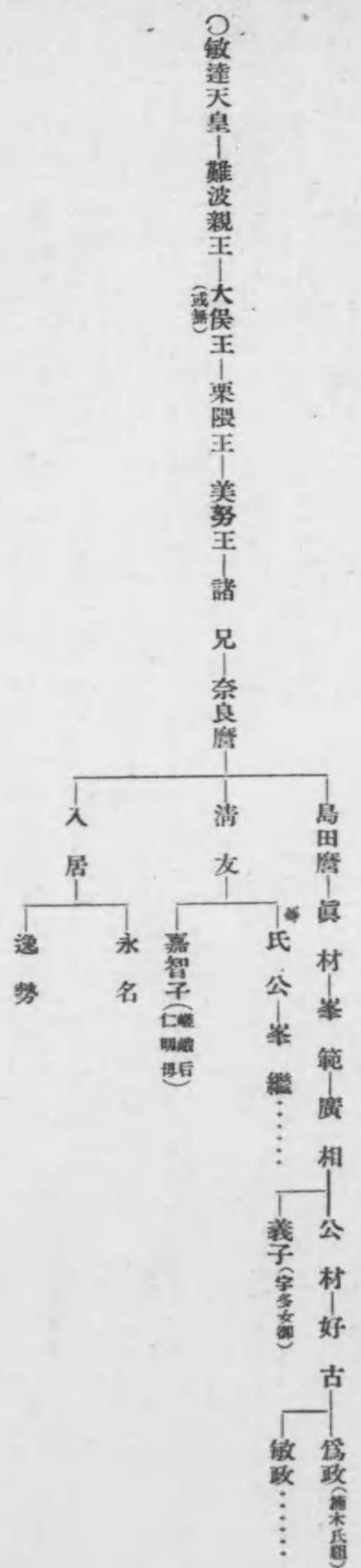
### 蘇我氏



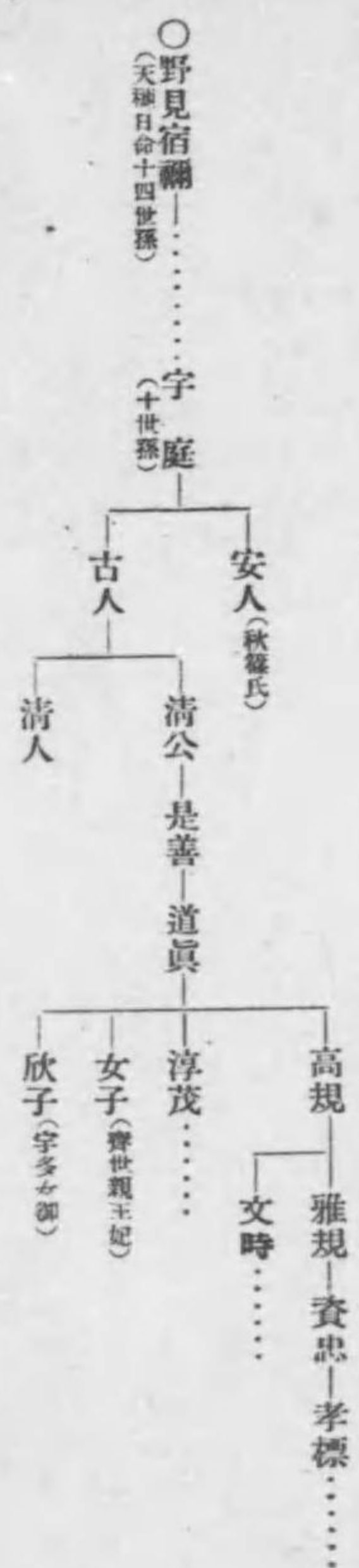
中臣氏



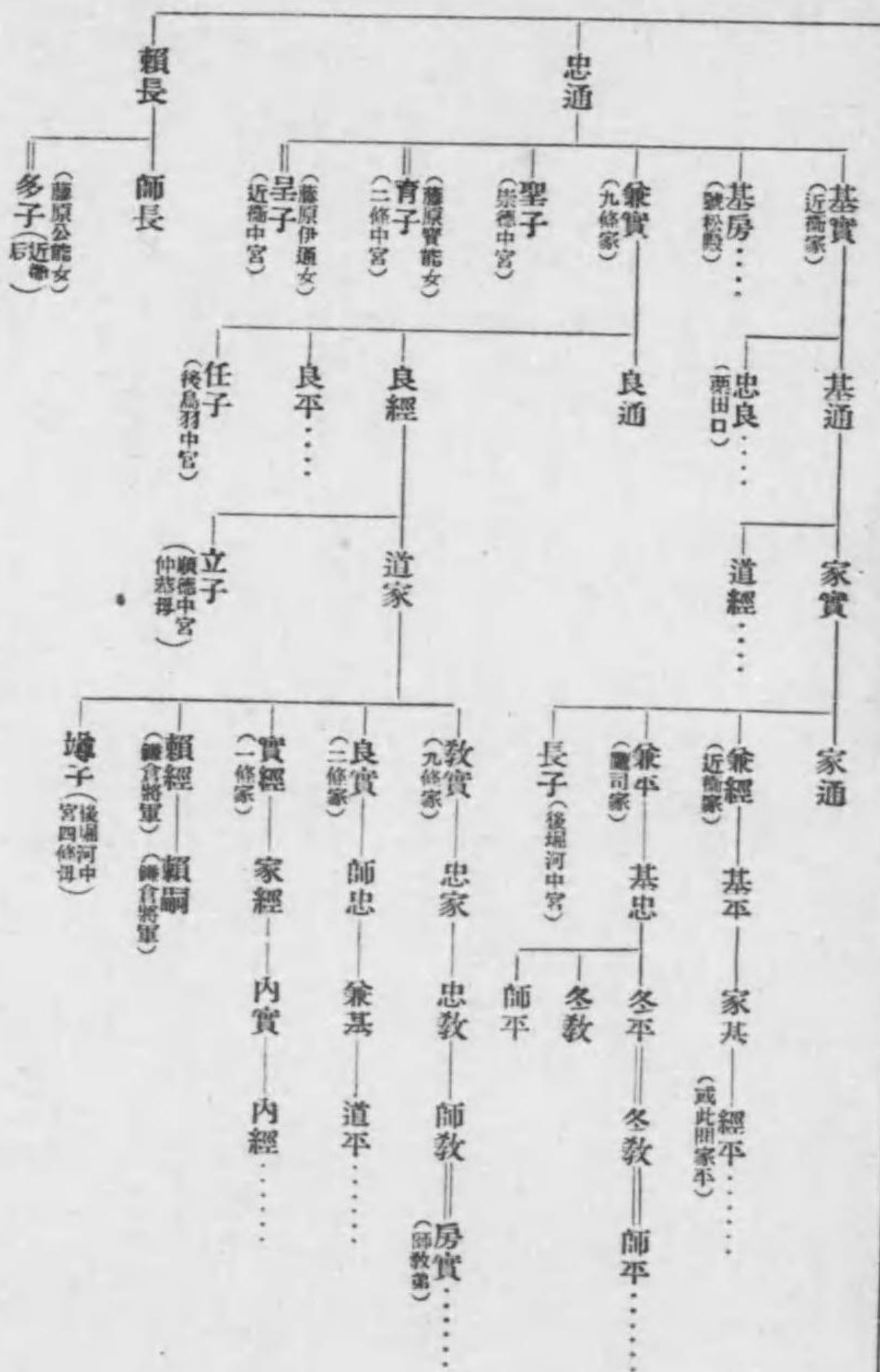
橘氏



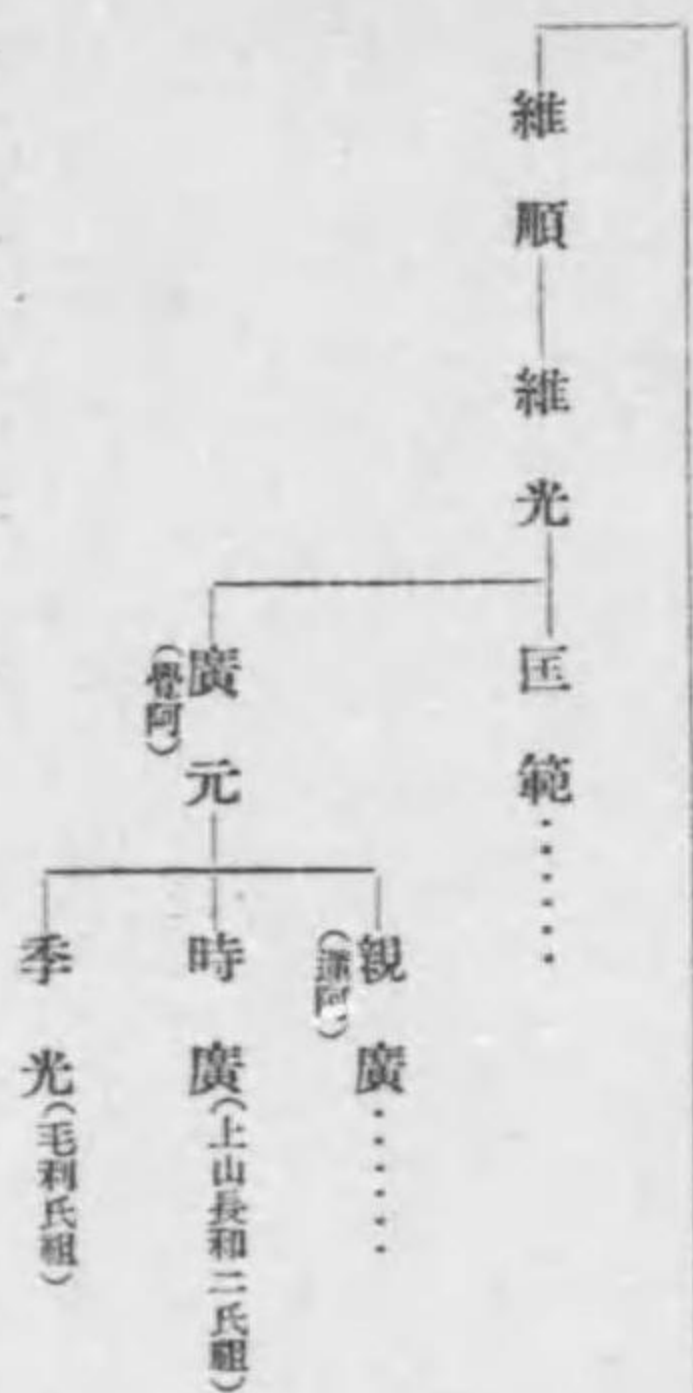
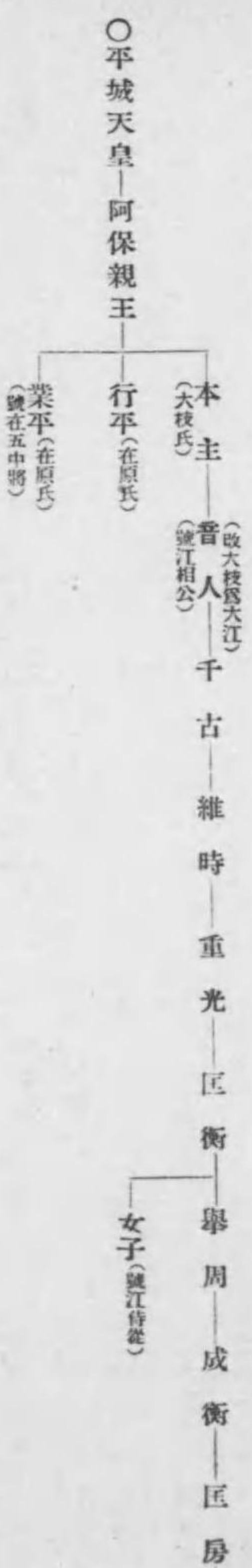
菅原氏



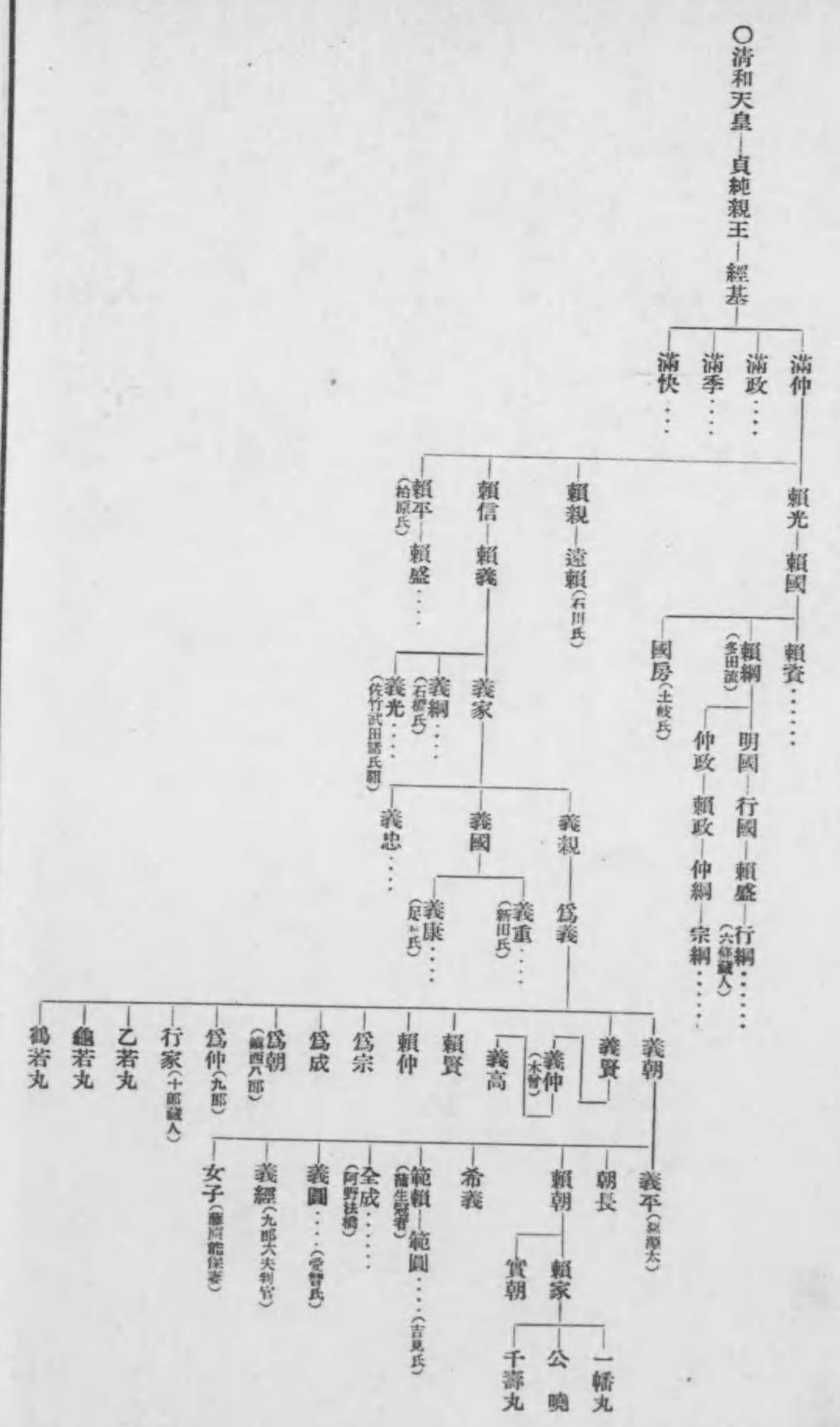




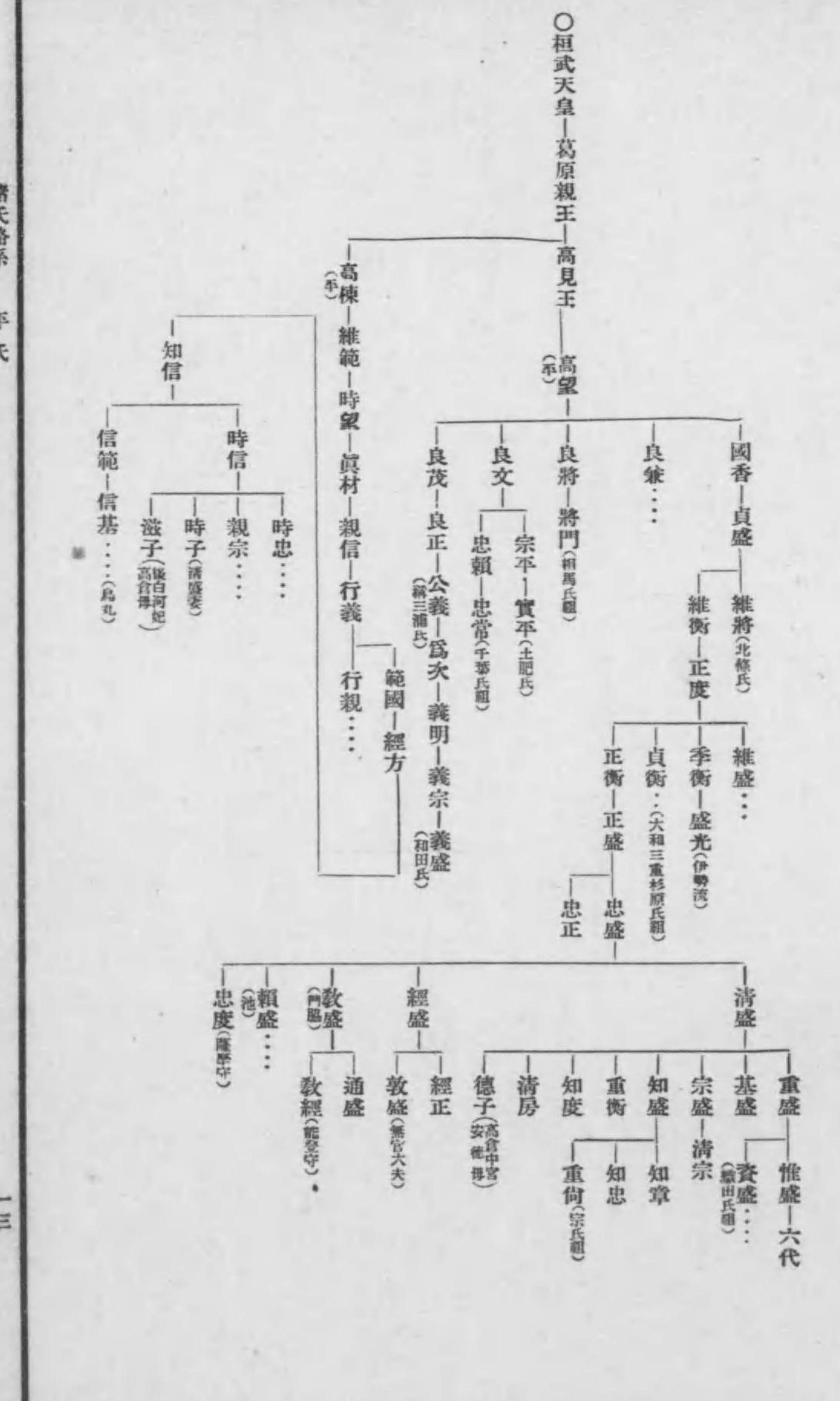
大江氏



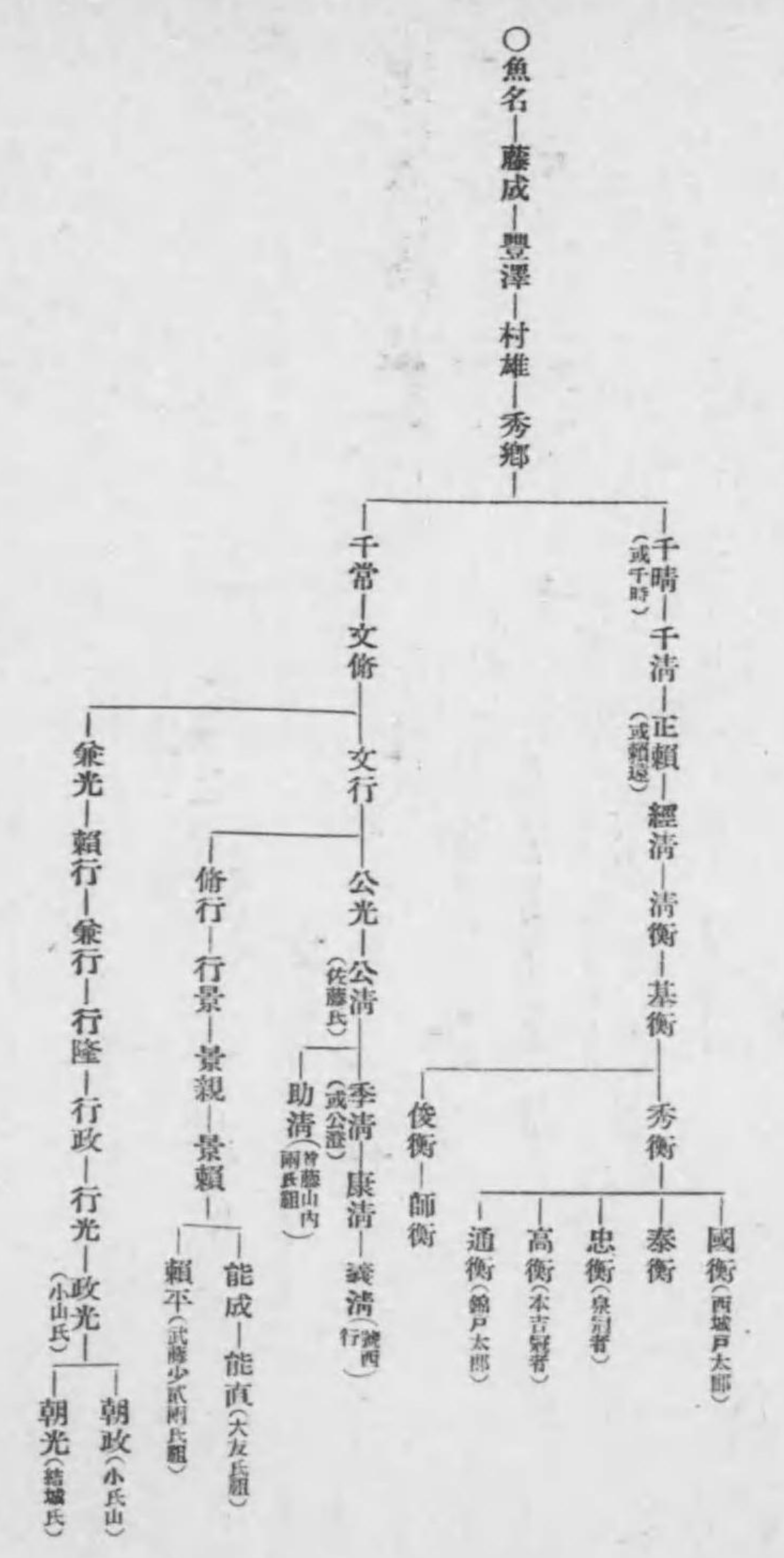
源氏



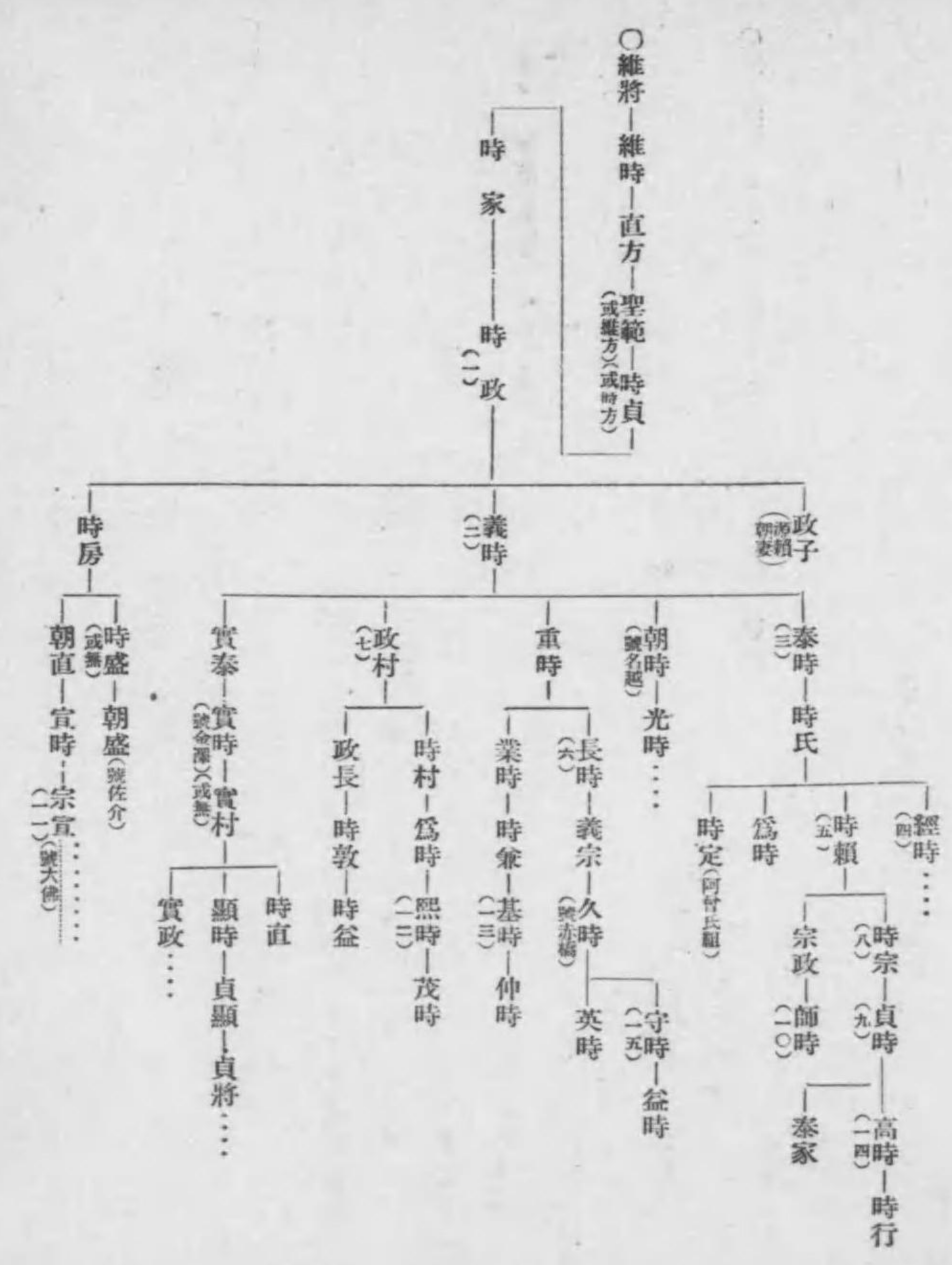
平氏



### 藤原秀郷流

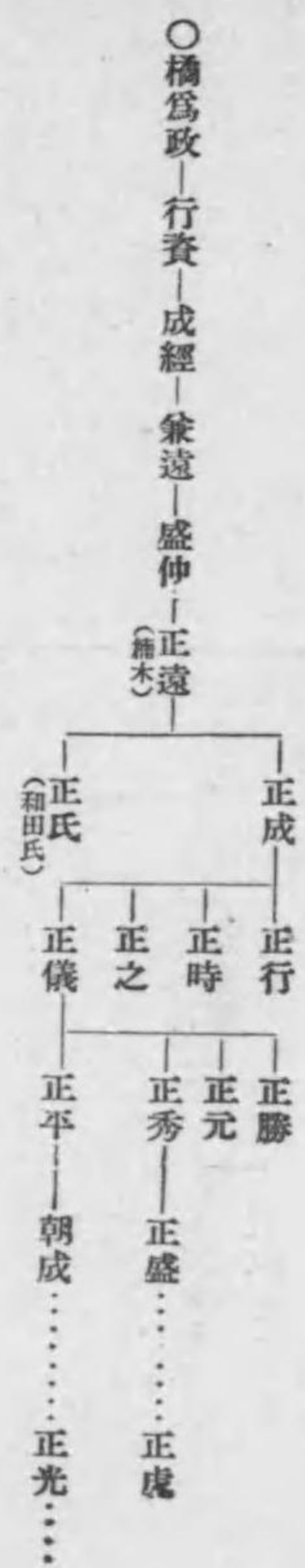


### 北條氏 (肩の数字は執権順を示す)



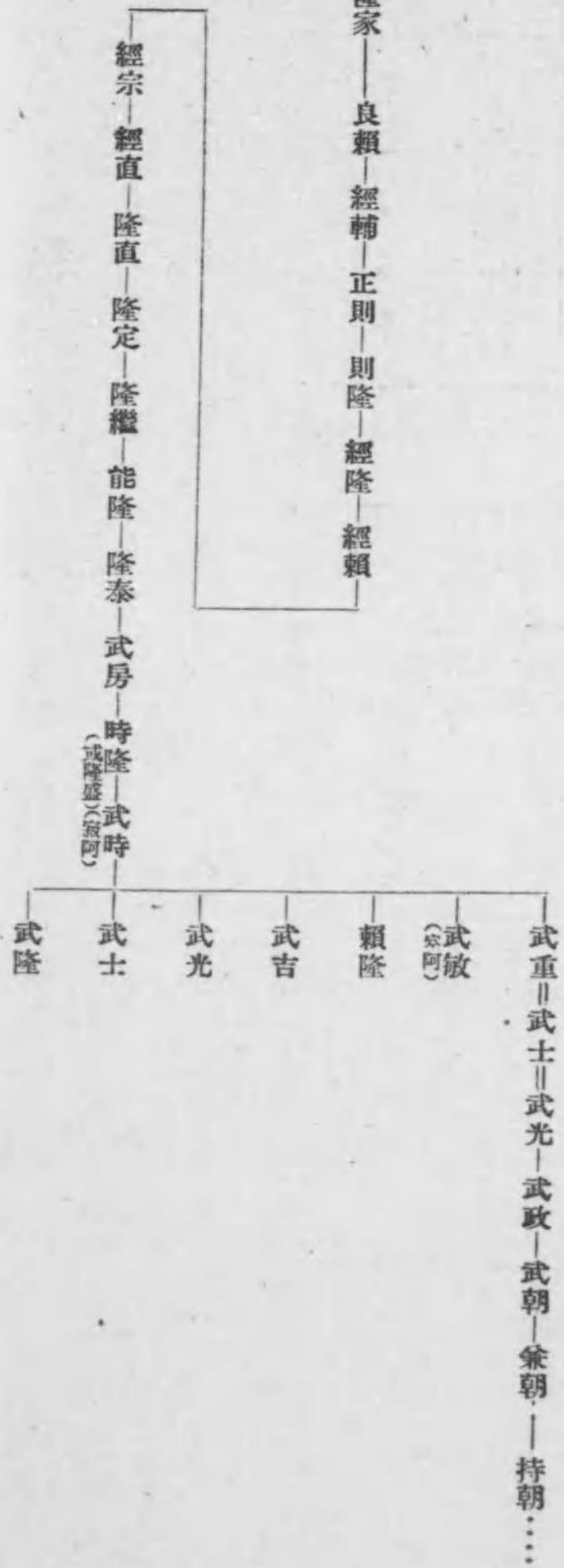


### 楠木氏



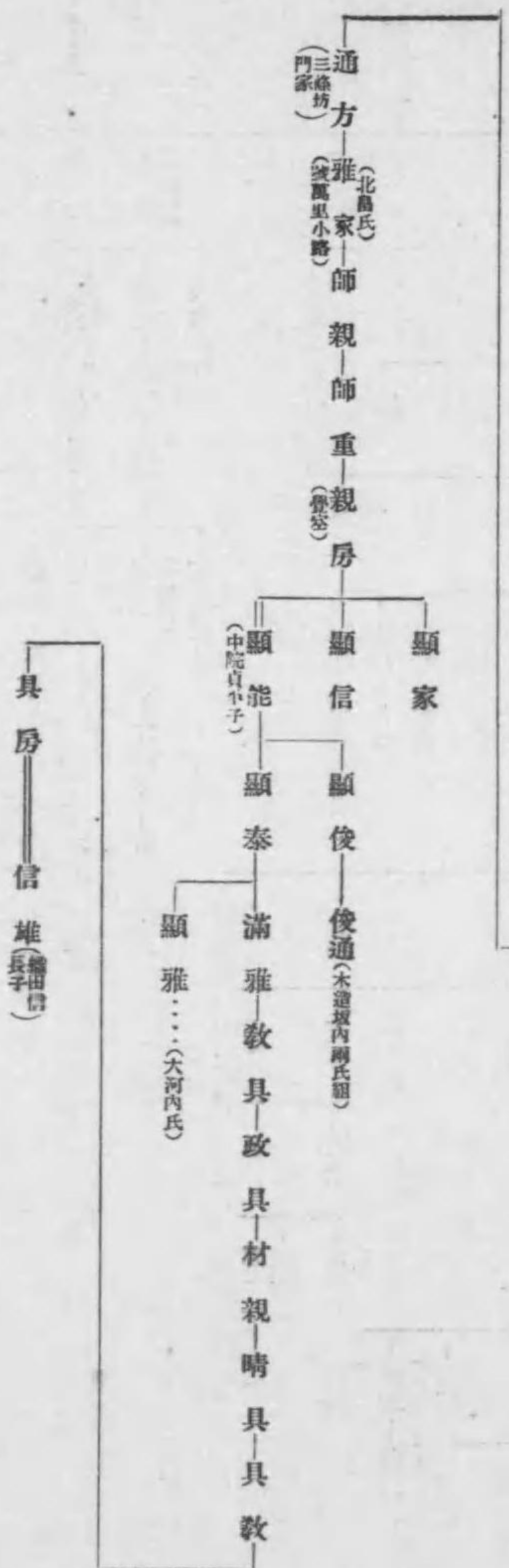
### 菊池氏

○藤原隆家—良賴—經輔—正則—則隆—經隆—經賴

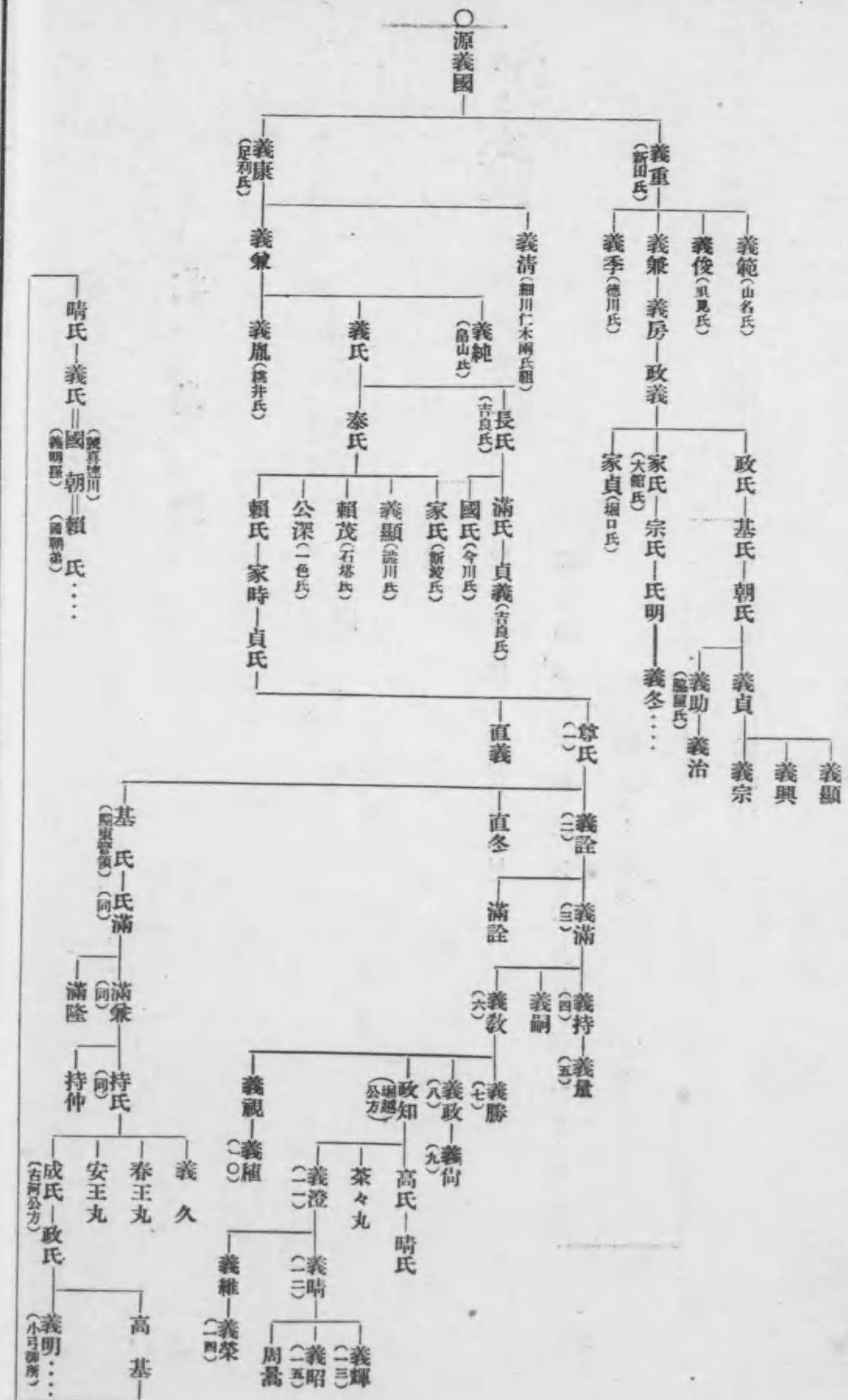


### 北畠氏

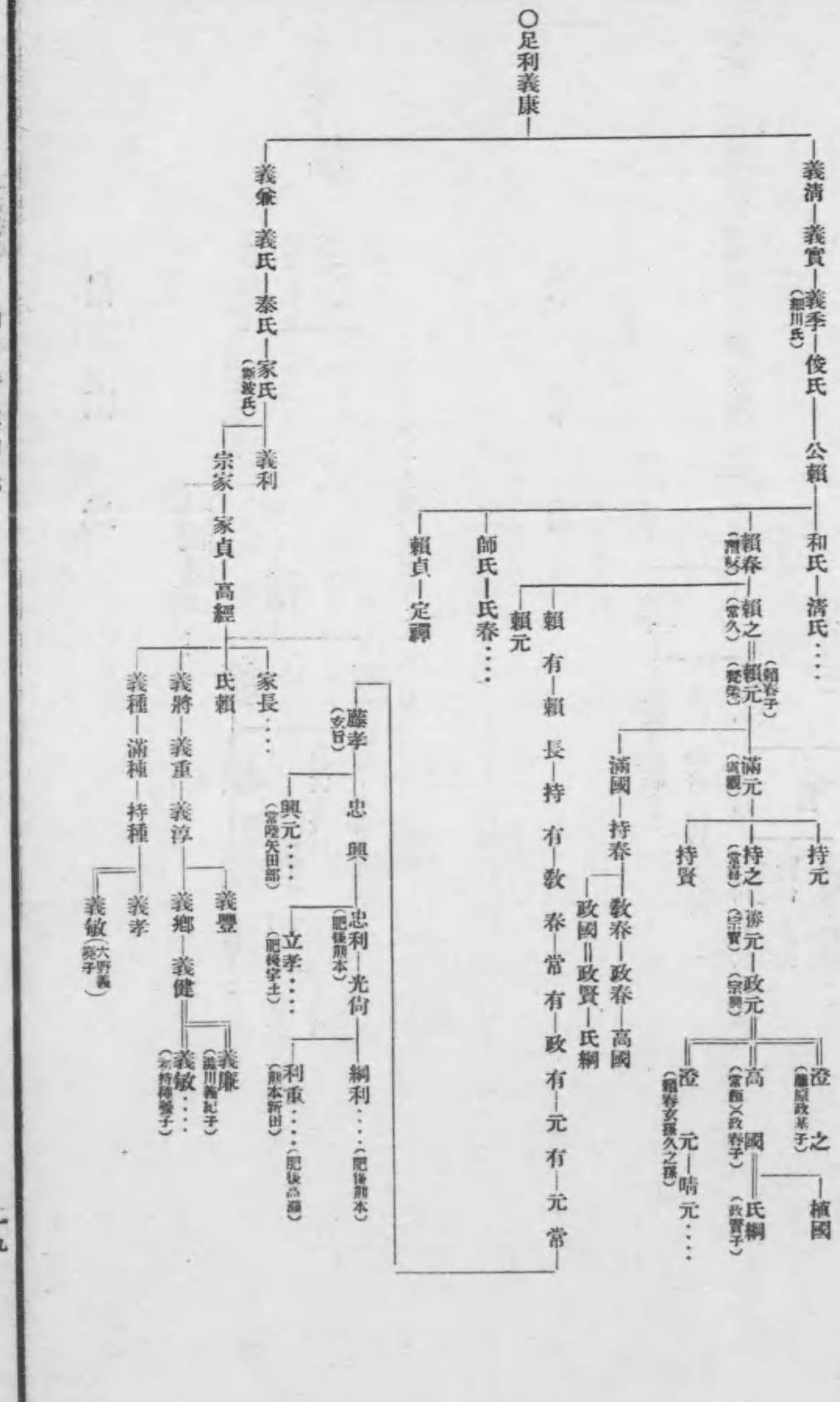
○村上天皇—具平親王—師房—顯房—雅實—雅定—雅通—通親



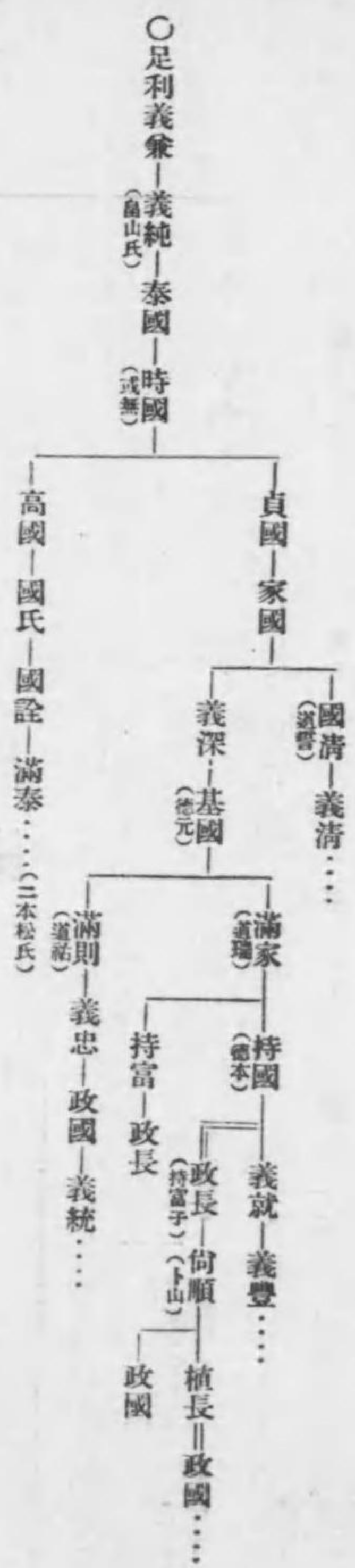
新田足利兩氏 (足利氏の肩の数字は將軍の代數とす)



細川斯波兩氏



畠山氏



赤松氏



山名氏

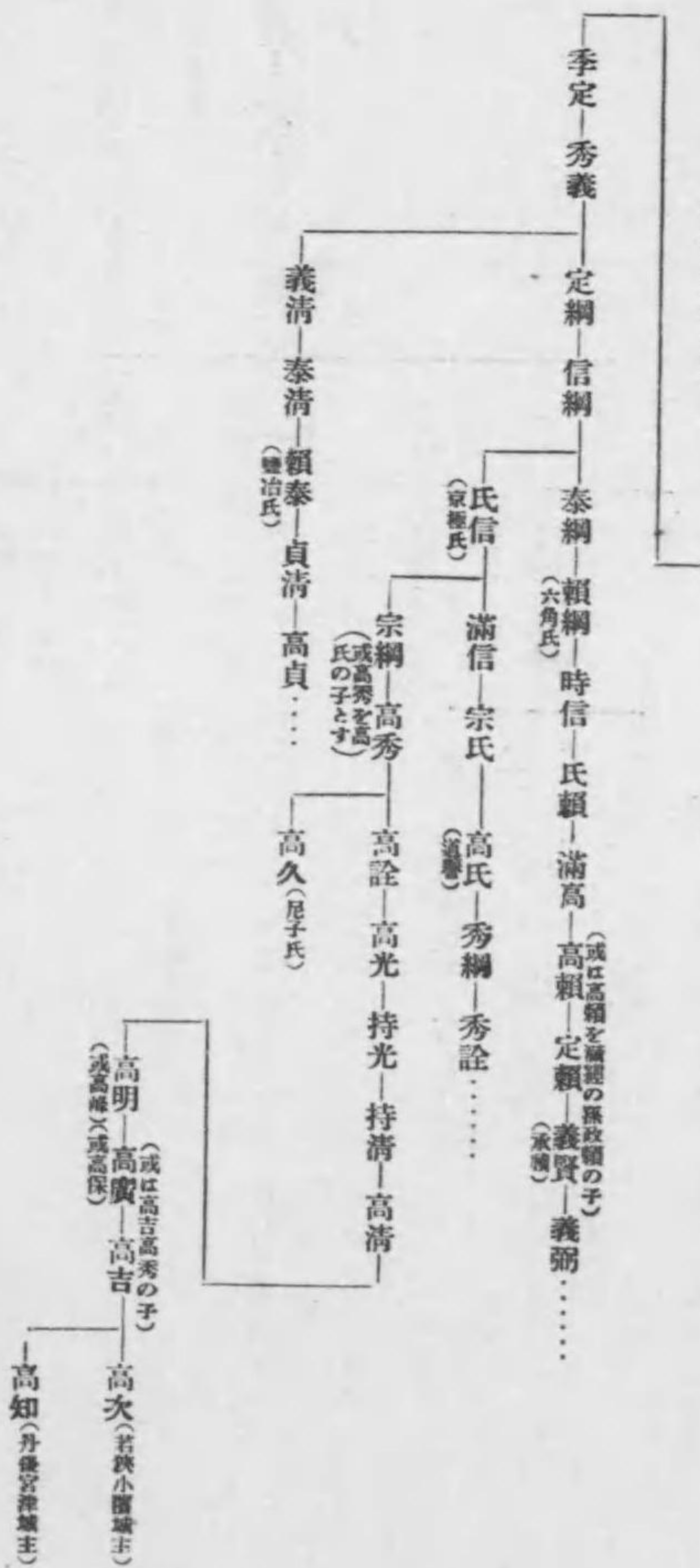


今川氏



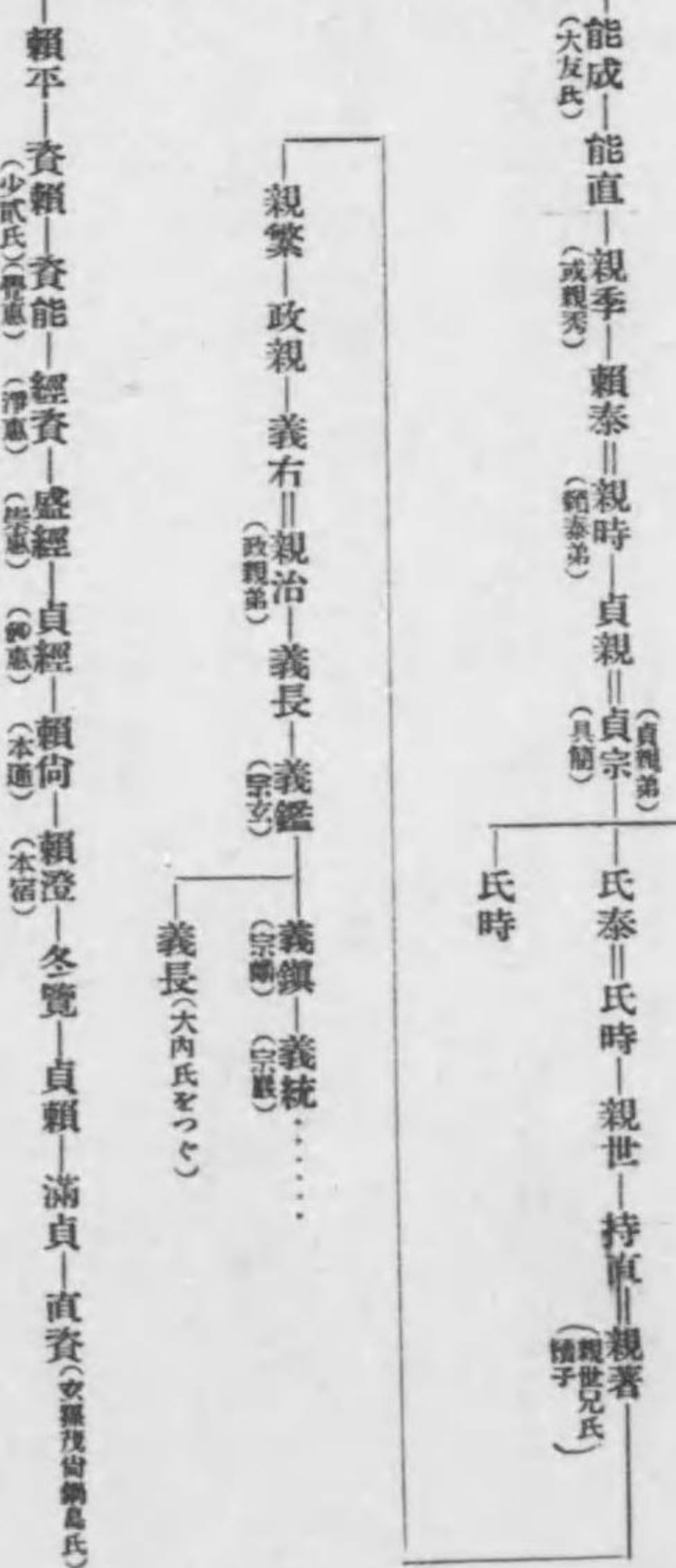
### 佐佐木氏

○宇多天皇—敦實親王—雅信—扶義—成綱—章經—經方



### 少貳大友兩氏

○藤原秀郷………景賴



大内氏

○琳聖太子：正恒—藤根—宗範—茂村—保盛—弘真—貞長—貞長—盛房—弘盛—成長—兩氏

滿盛—弘成—弘貞—弘家—重弘—弘幸—弘世—義弘—持世—教弘—政弘—義興—義隆—義長

持盛—教幸—任世—山日氏

教弘

結城小山兩氏

○藤原秀郷……………行政—行光—政光—朝政—朝長—長村—時朝—宗朝—貞朝—秀朝—朝氏—氏政—義政……………

(小山氏)

朝光—朝廣

廣綱—時廣—貞廣—朝祐—直光—基光—滿廣—氏朝

祐廣—宗廣—親朝—顯朝—滿朝—氏朝……………

持朝—成朝—長朝—氏廣—政朝—高朝—晴朝—秀康

朝常—政常……………

朝常—政常……………

朝常—政常……………

朝常—政常……………

上杉氏

○藤原清房—重房—賴重—重顯—朝定—顯定—氏定—持定—持朝—顯房—政真—定政—朝良—朝興—朝定

賴成……………

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

重能—顯能

○藤原清房—重房—賴重

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

○藤原清房—重房—賴重

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

○藤原清房—重房—賴重

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

○藤原清房—重房—賴重

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

賴顯

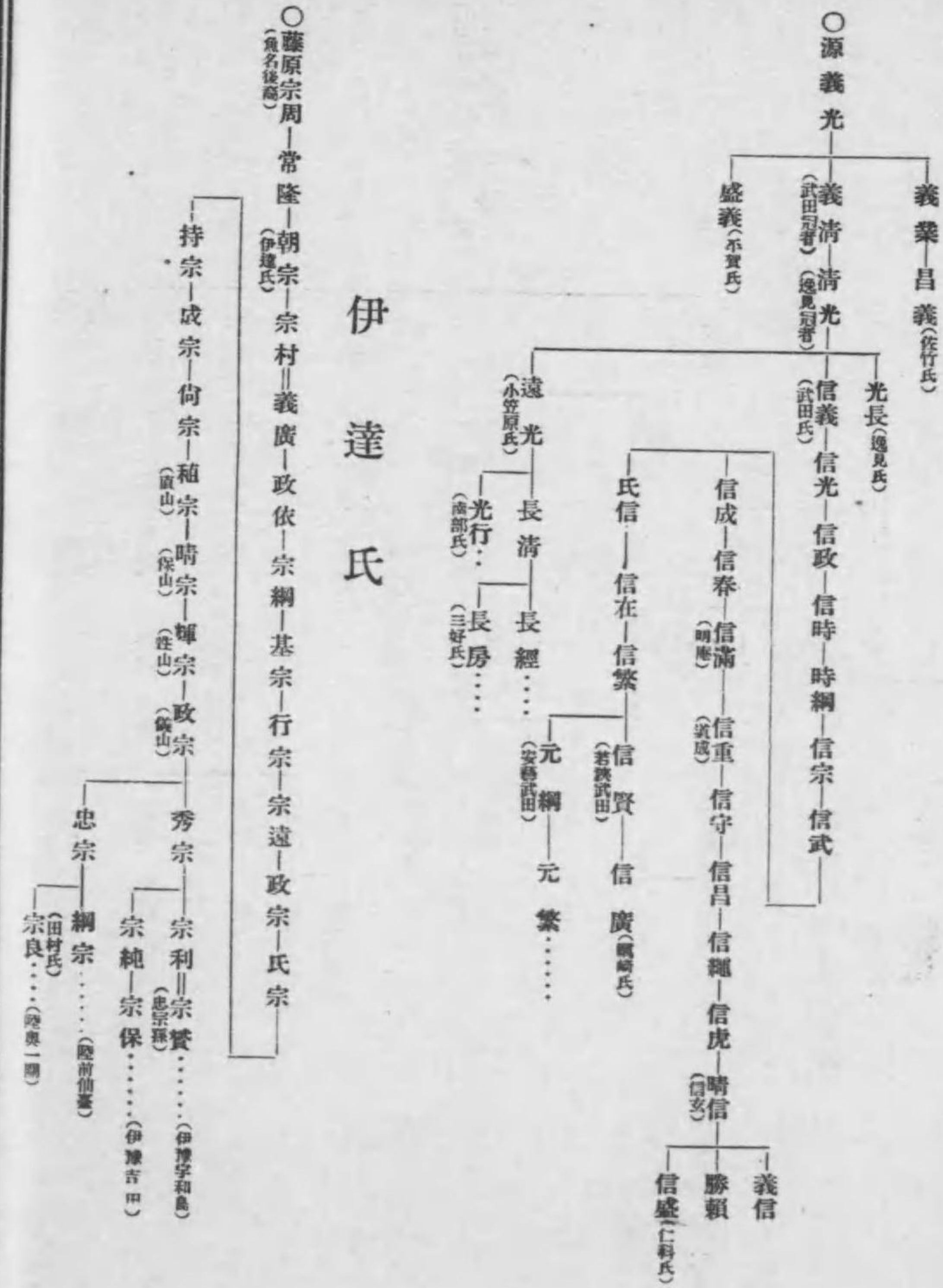
賴顯

賴顯

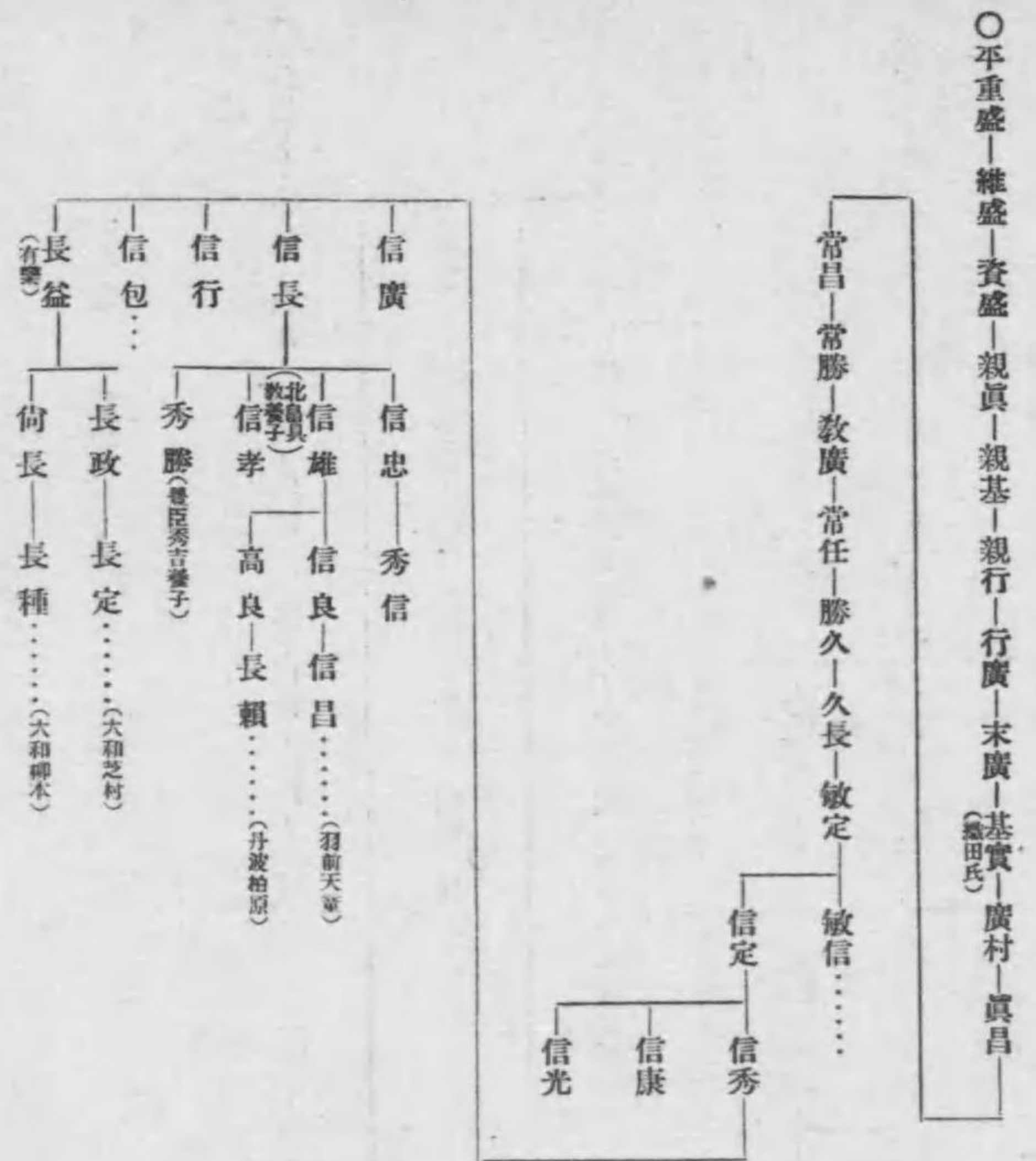
賴顯

賴顯

### 武田氏



### 織田氏



毛利氏

○大江音人—千古—維時—重光—匡衡—舉周—成衡—匡房—維順—維光—廣元—季光  
(毛利氏)

經光—時親—貞親—親衡—元春—廣房—光房—照元—豐元



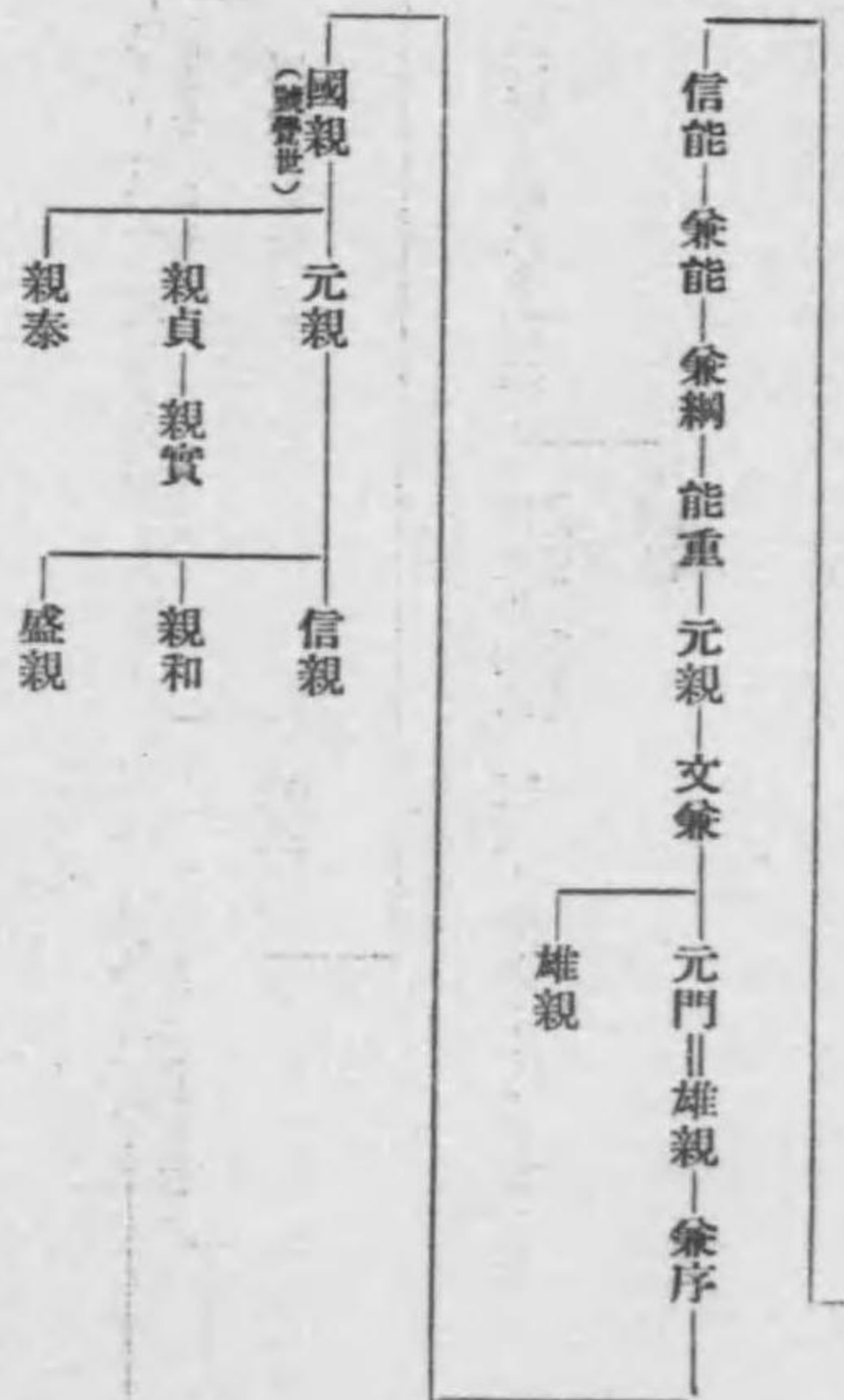
島津氏

○源賴朝—忠久—忠義—久經—忠宗—貞久—氏久—久豐—忠國—友久—運久—忠良  
(島津氏) (或忠時) (或忠時) (或忠時) (伊作氏祖)

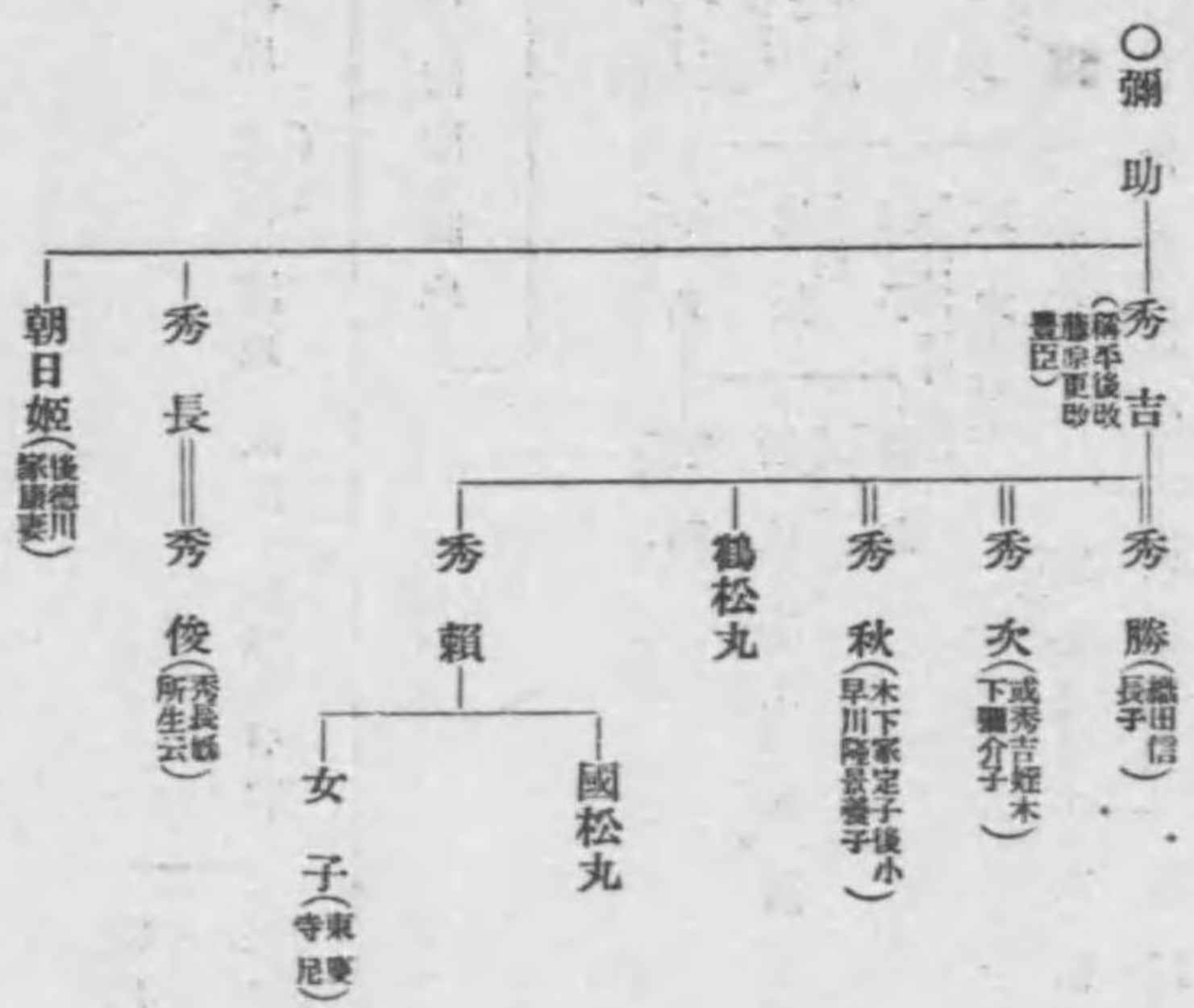


長曾我部氏

○秦川勝………  
(改定親部後將合親部)  
能俊 俊宗 忠俊 重氏 氏幸 滿幸 兼光 重俊 重高 重家  
(川勝二十五世孫)

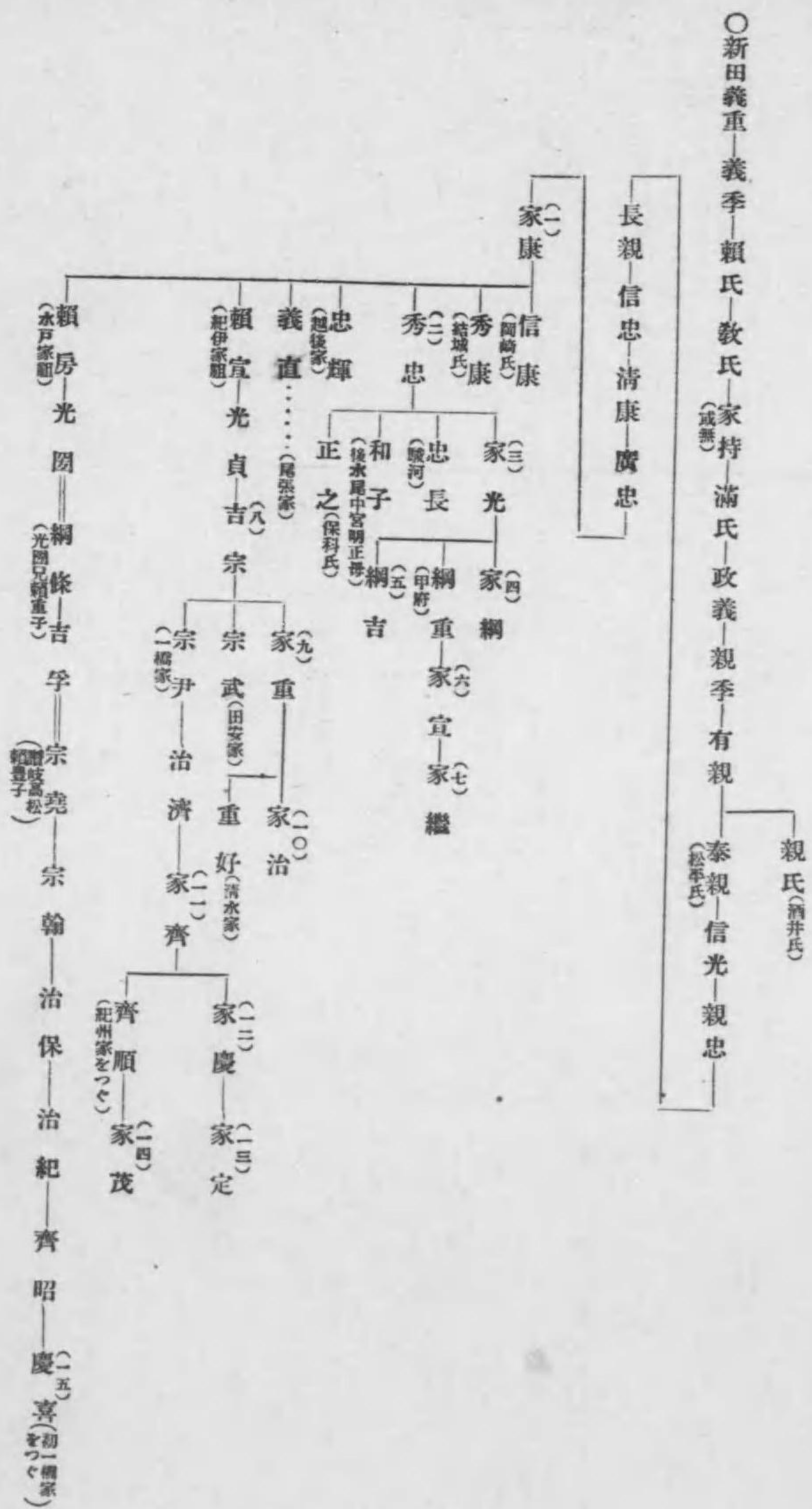


豐臣氏





徳川氏 (肩書の数字は將軍の代數とす)

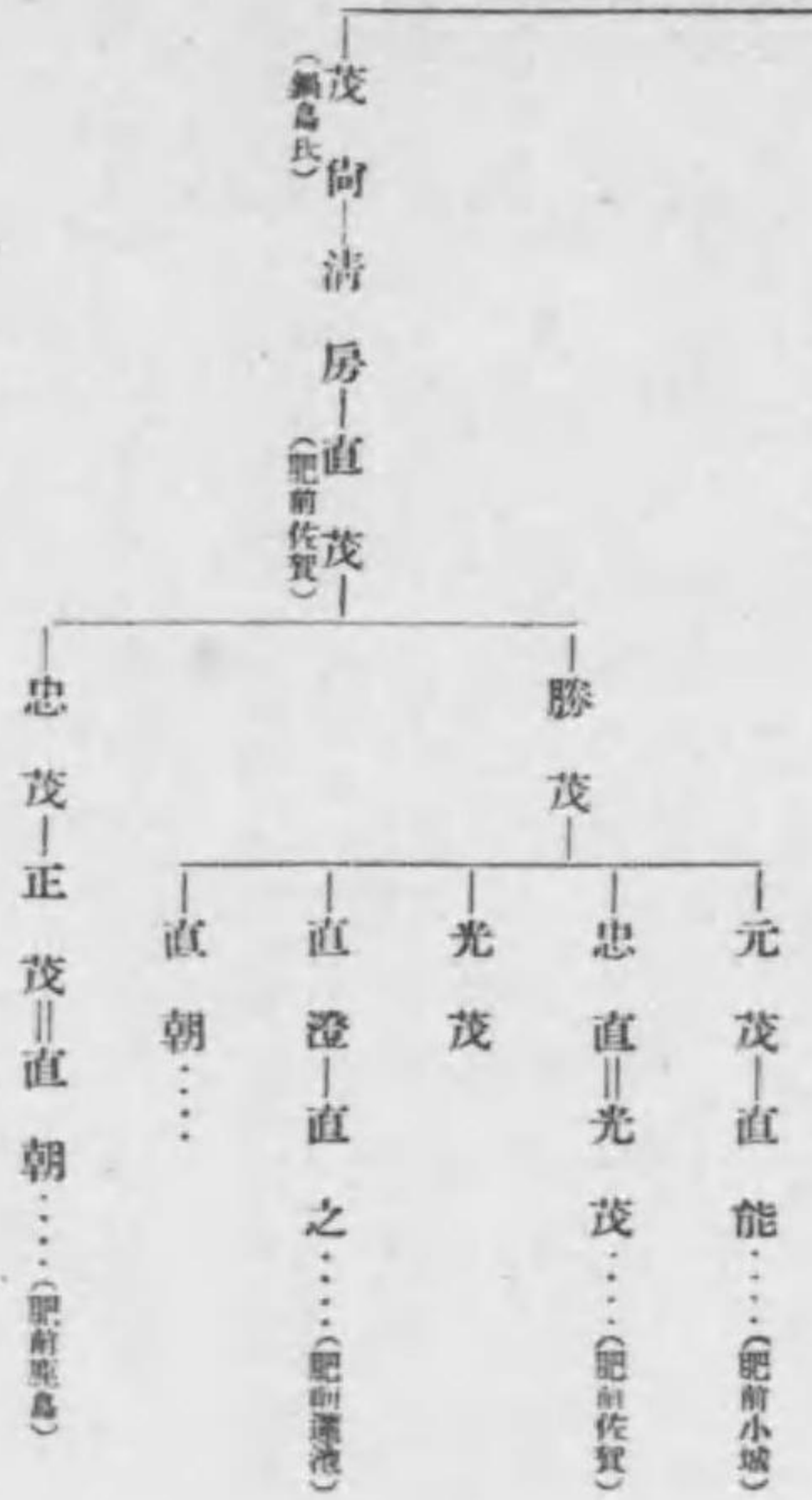


前田氏



鍋島氏

○少貳頼澄—冬實—貞頼—滿貞—直資—嘉頼—經直—經房—



年數早見表

(神武天皇紀元元年より皇極天皇に至る一千三百四年の間年號なく年號は實に紀元一千三百五年孝德天皇の大化元年に始まる○欄内の干支は各年號の元年に當れるものなり)

大化乙丑	白雉庚午	白鳳壬申	朱鳥丙寅	大寶辛丑	慶雲甲辰	和銅庚申	靈龜乙卯	養老丁巳
神龜甲子	天平己巳	天長甲子	天寶甲辰	天寶甲辰	神護己巳	景雲丁未	寶龜庚辰	天應辛酉
延曆壬辰	大同丙戌	弘仁庚寅	天長甲子	承和甲寅	嘉祥辰戌	仁壽辛未	齊衡戊辰	天安丁巳
貞觀己未	元慶丁酉	仁和己巳	寬平己未	昌泰戊午	延喜辛酉	延長未癸	承平辛卯	天慶戊戌
天曆丁未	天德丁巳	應和辛酉	康保甲辰	安和辰戌	天祿庚午	天延癸卯	貞元丙子	天元戊戌
永觀癸未	寬和乙酉	永延丁未	永祚己未	正曆庚寅	長德乙未	長保己未	寬弘甲辰	長和壬子
寬仁丁巳	治安辛酉	萬壽甲辰	長元戊辰	長曆丁巳	長久庚辰	寬德甲辰	永承丙辰	天喜癸巳
康平戊辰	治曆乙巳	延久己未	承保甲辰	承曆丁巳	永保辛酉	應德甲辰	寬治丁卯	嘉保甲辰
永長丙子	承德丁未	康和己未	長治甲辰	嘉承丙辰	天仁戊辰	天永庚辰	永久己未	元永戊辰
保安庚子	天治甲辰	大治丙午	天承辛未	長承壬子	保延卯乙	永治辛酉	康治壬辰	天養甲子
久安乙未	仁平辛未	久壽戊辰	保元丙子	平治己未	永曆庚辰	應保己未	長寬未癸	永萬酉乙
仁安丙辰	嘉應乙未	承安卯辛	安元乙未	治承丁酉	養和辛未	壽永壬辰	元曆甲辰	文治乙未
建久庚戌	正治己未	建仁辛酉	元久甲子	建永寅丙	承元卯丁	建曆未辛	建保癸未	承久卯己

年數早見

貞應 壬午二(一八八三)	元仁 甲申一(一八八四)	嘉祿 乙酉二(一八八五)	安貞 丁酉二(一八八七)	寬喜 己酉三(一八八九)	貞永 壬辰一(一八九三)	天福 癸巳一(一八九三)	文曆 甲午一(一八九四)	嘉禎 乙未三(一八九七)
曆仁 戊戌一(一八九八)	延應 亥巳一(一八九九)	仁治 庚子三(一九〇三)	寬元 癸卯四(一九〇三)	寶治 未丁二(一九〇七)	建長 酉己七(一九〇九)	康元 辰丙一(一九一六)	正嘉 丁酉二(一九一七)	正元 己未一(一九一九)
文應 申一(一九〇〇)	弘長 酉辛三(一九〇二)	文永 甲子二(一九〇四)	建治 亥乙三(一九〇五)	弘安 戌己三(一九〇七)	正應 子戊五(一九〇九)	永仁 巳癸六(一九一三)	正安 亥己三(一九一六)	乾元 壬寅一(一九一九)
嘉元 卯癸三(一九一六)	徳治 午丙二(一九一七)	延慶 申戊三(一九一九)	應長 亥辛一(一九二一)	正和 子壬五(一九二三)	文保 丁酉二(一九二七)	元應 未己二(一九二九)	元享 酉辛三(一九三二)	正中 甲子二(一九三六)
嘉曆 丙寅三(一九三六)	元徳 己巳二(一九三九)	元弘 未辛三(一九四一)	正慶 申壬二(一九四二)	建武 戌甲二(一九四六)	延元 丙子四(一九四九)	興國 辰庚六(一九五〇)	正平 丙戌二(一九五二)	建徳 戊辰二(一九五五)
文中 壬子三(一九四三)	天授 卯乙六(一九四五)	弘和 酉辛三(一九四七)	元中 甲子九(一九四九)	北朝	曆應 戊辰四(一九四九)	康永 午壬三(一九五〇)	貞和 乙酉五(一九五二)	觀應 庚辰二(一九五五)
文和 壬辰四(一九五三)	延文 申丙五(一九五五)	康安 丑辛一(一九五七)	貞治 壬午六(一九五七)	應安 申戊七(一九五八)	永和 卯乙四(一九五九)	康曆 己未二(一九六〇)	永徳 酉辛三(一九六二)	至徳 甲子三(一九六六)
嘉慶 卯丁二(一九六七)	康應 己巳一(一九六九)	明德 午庚三(一九七〇)	明德 酉癸一(一九七二)	應永 戌甲四(一九七四)	正長 申戊一(一九七八)	永享 己酉三(一九八〇)	嘉吉 酉辛三(一九八二)	文安 甲子五(一九八四)
寶徳 己巳三(一九八九)	享徳 申壬三(一九九二)	康正 亥乙二(一九九五)	長祿 丑丁三(一九九七)	寛正 辰庚六(一九九七)	文正 戌丙一(一九九九)	應仁 亥丁二(一九九七)	文明 己巳八(一九九七)	長享 未丁二(一九九八)
元龜 午三(一九九〇)	天正 酉癸元(一九九三)	文祿 辰壬四(一九九三)	慶長 申丙元(一九九六)	元和 卯乙九(一九九七)	寛永 子甲〇(一九九八)	正保 申甲四(一九九八)	元祿 辰戊六(一九九八)	慶安 子戊四(一九九八)
明暦 未乙三(一九九五)	萬治 戌戊三(一九九八)	寛文 丑辛三(一九九八)	延寶 丑癸八(一九九八)	天和 酉辛三(一九九八)	貞享 子甲四(一九九八)	寶曆 未辛三(一九九八)	明和 申甲八(一九九八)	安永 辰壬九(一九九八)
享保 申丙〇(一九九六)	元文 辰丙五(一九九六)	寛保 酉辛三(一九九六)	延享 子甲四(一九九六)	寛延 辰戊三(一九九六)	寶曆 未辛三(一九九六)	明和 申甲八(一九九六)	安永 辰壬九(一九九六)	天明 辛甲八(一九九六)
寛政 酉己三(一九九六)	享和 酉辛三(一九九六)	文化 子甲四(一九九六)	文政 寅戊三(一九九六)	天保 寅庚四(一九九六)	弘化 甲辰四(一九九六)	嘉永 申戊六(一九九六)	安政 寅甲六(一九九六)	萬延 申庚一(一九九六)
文久 辛三(一九五三)	元治 子甲一(一九五三)	慶應 丑乙三(一九五三)	明治 辰寅三(一九五三)	大正 子壬五(一九五三)				

索 引

(字音假名遣は便宜のために發音に依りて區別す、例へば) 外をがい、桓をかん、皇族をこうぞく、とせるが如し(は)

あ

- 安倍貞任の叛 二七八
- 足利高氏六波羅を陥る 三九
- 足利と新田と相對す 四〇
- 足利尊氏鎌倉に自立す 四〇
- 足利尊氏の人物 四〇
- 足利尊氏敗れて九州に走る 四二
- 足利尊氏光明天皇を擁立す 四二
- 足利尊氏の税法 四二
- 足利時代の武士氣質及其變化の原因 四三
- 足利直義と高師直との衝突 四三
- 足利直冬同直義同尊氏の黨與相争ふ 四三
- 足利尊氏光嚴帝を立つ 四三
- 足利尊氏の死 四三
- 足利氏の權執事に移る 四三
- 足利氏滿の異圖 四三
- 足利氏滿天下を一統す 四三
- 足利氏滿の人物 四三
- 足利氏滿當時の好尚及美政 四三
- 足利氏滿の封册を受く 四三

索 引 あ

- 足利氏滿死し法皇號を贈らる 四五一
- 足利義教の勵精 四五一
- 足利持氏の自立 四五一
- 足利義政帝王の儀を具ふ 四五一
- 足利時代の技藝 四五一
- 足利時代の文學 四五一
- 足利義政其室富子 四五一
- 足利義昭織田信長を忌む 四五一
- 足利義昭織田信長と戦ひて敗る 四五一
- 赤松圓心出づ 四五一
- 赤松滿祐將軍義教を殺す 四五一
- 赤松氏亡ぶ 四五一
- 朝倉義景 四五一
- 淺井長政 四五一
- 明智光秀織田信長を殺す 四五一
- 東常縁 四五一
- 愛親覺羅族朝鮮を助けんとす 四五一
- 赤穂義士の復仇 四五一
- 新井君美の出身 四五一
- 新井君美の硬貨政策 四五一
- 新井君美將軍を國王とし主權を取らんとす 四五一

- 淺間山の噴火 六二
- 阿部正弘水野忠邦に代る 七〇
- 阿部正弘荷蘭國の密旨を難す 七〇
- 安藤信隆の執政 七〇
- 出雲朝廷と神武天皇一家の抗争 七
- 磐井九州に據つて叛す 七
- 一向宗獨り榮ゆ 七
- 伊勢長氏の成功 七
- 今川義元亡ぶ 七
- 石田三成の人物及地位 四八
- 石田三成徳川家康を責む 四八
- 石田三成の反間成らず 四八
- 石田三成の擧兵 四八
- 石田三成徳川家康兩軍の形勢 四八
- 石田三成黨の大敗 四八
- 池田光政 四八
- 異端排撃 六三
- 異學禁止の令 六三
- 異船砲撃の令 六三

犬を殺すを禁ず  
伊藤仁齋  
井伊直弼の老  
井伊直弼水戸侯以下を屈す  
井伊直弼の人物  
井伊直弼の擅權  
井伊直弼の暗殺

う

歌垣にて男女相戀ふの風  
鹿戸皇子の政制草定  
宇多天皇藤原基經に謝す  
宇多天皇の賢明  
上杉景虎  
上杉景虎武田晴信と戦ひ北條氏を攻む  
上杉景勝直江兼續石田三成に黨す  
上杉景勝の擧兵  
上杉景勝以下徳川家康に服す

え

蝦夷の背叛  
江戸大阪の比較  
江戸の大火  
江戸生活の榮華  
江戸文學の再變

江戸文學の喜劇的特色  
英艦來らんとす

お

大伴族の發達  
大伴物部二氏の争  
女を座長とするの風  
王制始めて生じ國家始めて成る  
大海人皇子の一統  
王權衰頽の源因  
大江廣元  
皇子の將軍  
王朝武士黨の反目  
應仁の大亂  
大内義興京都の權を擡る  
大内義隆亡ぶ  
織田信長  
織田信長今川義元を亡ぼす  
織田信長徳川家康と同盟  
織田信長の上洛  
織田信長淺井朝倉兩氏を破る  
織田信長比叡山本願寺の僧兵を取る  
織田信長の政治  
織田信長の城廓陣法

織田信長世風を一變す  
織田信長部下の人物  
織田信長の毛利氏征伐  
奥羽の豪族

か

外人の歸服  
外人襲撃の風  
漢倭の地名  
官位の授與  
柿本人麿  
桓武天皇の宗教及革弊  
歐洲形勢の變  
歐米通商を求む  
大鹽平八郎の亂  
萩生徂徠  
荷蘭國王の密旨  
荷蘭國王開闢を促がす  
王霸の衝突  
大奥の婦女政治に容喙す  
大阪方の再興  
大阪方敗北して和す  
大坂方の再興  
大奥の婦女政治に容喙す  
王霸の衝突  
荷蘭の貿易及其制限  
荷蘭國王開闢を促がす  
萩生徂徠  
大鹽平八郎の亂  
歐洲形勢の變  
歐米通商を求む

桓武天皇の政策

桓武天皇皇室を平人の上に立つ  
桓武天皇より北條時代に至る宗教の變遷  
鎌倉政府の位地  
鎌倉以前の文學  
鎌倉武士の氣質  
鎌倉士風を作りし文學  
鎌倉の内亂  
鎌倉氏滿の異圖  
鎌倉の内紛  
金が崎城陷る  
金配り  
海賊  
學問の欠乏  
學問上の人心統一  
外征軍歸る  
春日局  
海外遠征の雄圖  
寛政當時學問の沿革  
官學私學の争論  
開國的主義の實行  
和宮の降嫁

九州女酋の勢力  
九州の豪族  
貴族生活の進歩  
貴族僧侶の跋扈  
貴族と寺院平民を厭す  
貴族の軟弱迷信  
貴族の文彩風物淫蕩の習俗  
貴族食を四方に乞ふて生く  
貴族將軍を擁して功なし  
行基宗教に抗す  
吉備眞備狀かる  
舊族地方に去り新族地方より入る  
舊社會解けて新統合生ぜんとす  
舊社會の聯鎖悉く絶ゆ  
偽善謙退の風朝廷に盛  
契丹九州に來襲す  
清原武衡の叛  
北畠顯家の敗死  
菊池氏の廢亡  
京都鎌倉の内紛  
京都の無政府  
京都長州藩士の手に落つ  
驕奢より徳政を生ず  
基督教の傳來

禽獸保護の令  
木下順庵

熊襲は何族か  
百濟衰へて新羅盛  
百濟の滅亡  
君民共治の誓言  
藥子仲成の亂  
藏人の新置  
楠正成の現出  
成の敗北  
楠正行  
楠正儀の降服  
公卿と武士と相對す  
公卿足利義滿に媚附す  
公卿江戸に媚附す  
熊澤蕃山  
群黨田沼意次を攻む  
群黨井伊直弼を攻む  
血族を重んずる古風  
景行天皇九州を征す  
權臣の跋扈

け

禽獸保護の令 六四四  
木下順庵 六四四  
熊襲は何族か 三〇  
百濟衰へて新羅盛 八七  
百濟の滅亡 一一九  
君民共治の誓言 一一三  
藥子仲成の亂 三〇三  
藏人の新置 三二八  
楠正成の現出 九六  
成の敗北 一五  
楠正行 四二八  
楠正儀の降服 四三九  
公卿と武士と相對す 四〇四  
公卿足利義滿に媚附す 四五一  
公卿江戸に媚附す 〇七  
熊澤蕃山 五九八、六二二  
群黨田沼意次を攻む 六五九  
群黨井伊直弼を攻む 七二七  
血族を重んずる古風 一一  
景行天皇九州を征す 六八  
權臣の跋扈 五五

顯宗天皇の即位  
 玄昉橘藤原兩氏に抗す  
 檢非違使の新置  
 源氏の發達及其特性  
 源氏の平氏に凌がれし所以  
 元の勃興  
 元寇の第一回  
 元軍風濤に逢ふて歸る  
 元寇の第二回顯覆す  
 京畿の職  
 京師荒廢して公卿四散す  
 建武式目  
 藝能の人士林に列す  
 元祿武士の氣風

皇族及武内大臣二族の發達  
 皇族鎌倉に縋附す  
 皇族人物を出す  
 皇族兩派相陥擠す  
 後宮勢力の發達  
 古來の名族悉く絶え蘇我氏昌ゆ  
 國民的精神の勃發及存在の確定  
 國民始めて麥粟を知る  
 國民の性情一變す

國民の氣風習俗及法律道德  
 國民の自覺  
 高麗の滅亡  
 古事記の編纂  
 光明子皇后となり后位の變化  
 金銅盧遮那佛生ず  
 光仁天皇の擁立  
 剛愎なる諸藤  
 豪族上下を欺く  
 豪族發達して武門をなす  
 豪族北條氏に背く  
 豪族自ら擅にす  
 誇榮すべき大皇帝  
 後三條天皇藤原氏の權を抑ふ  
 後白河法皇源義仲を厭ふ  
 後鳥羽上皇鎌倉政府を覆さんとす  
 五攝家生じ皇子將軍となる  
 皇室の爭奪  
 皇位有期の閑職となる  
 後醍醐天皇出づ  
 後醍醐天皇寺院に頼つて北條氏を謀る  
 後醍醐天皇聖座を恐れて脱奔す  
 後醍醐天皇と尊氏と相對す

後醍醐天皇尊氏を除かんとす  
 後醍醐天皇尊氏と和す  
 後醍醐天皇逃れて吉野に藏くる  
 後醍醐天皇の崩御  
 後醍醐天皇何故に敗れし乎  
 混開十一年  
 小西行長平壤を取る  
 小西行長明軍を破る  
 五人組の制  
 後水尾帝徳川氏を愼る  
 皇親を將軍とするの議  
 硬貨の制  
 考證學  
 光格天皇の生父尊號の議  
 國防の經營  
 國家なる理想の現出  
 公武合體黨  
 三韓文明の風化  
 三韓の服屬  
 三韓征伐の國民生活に及せし結果  
 三韓益日本に遠ざかる  
 坂上氏起つて藤原氏と抗す

山陰の豪族  
 佐々上杉島津徳川諸氏豊臣秀吉に服屬  
 再度の外征諸侯功なし  
 佐竹義宣石田三成に同盟す  
 産業の進歩  
 酒井忠清の專權  
 佐久間修理の監禁  
 鎮國的攘夷黨  
 佐幕黨  
 薩長權を爭ふ  
 薩摩の公武合體説

社會組織變革して國守の權張る  
 社會經濟上の紛亂  
 社會亂離の勢成る  
 社會の新結合力  
 社會の行樂  
 社會的進歩  
 臣下天皇を作る  
 新羅百濟日本に離畔す  
 新羅名分上日本に離畔す  
 壬申の亂  
 壬申兩軍の兵勢  
 壬申の亂の結果  
 持統天皇の治世  
 聖武天皇頃大官の所得及人民の負擔  
 聖武天皇の奢侈迷信  
 神佛の混交  
 女皇等僧侶政府を作る  
 諸藤光仁天皇の擁立  
 小黨の敗北  
 小黨の滅亡  
 社交の發達風流の進歩  
 寺院武力を養ひて朝廷に抗す  
 寺院朝廷に迫る  
 寺院の武力再發して數諸侯に匹敵す  
 白河天皇の親政

白河天皇の佞佛と政治寺院の猖獗  
 白河法皇の驟騎噴火山に踴躍す  
 神器を有せざる天皇  
 眞永式目  
 思想文學の變と政治との關係  
 將軍宗尊親王廢せらる  
 人心王政を厭ふ  
 人心の沈睡  
 人心の沸騰  
 人心幕府に服せず  
 城下の發達  
 新編興の勢極まる  
 諸侯の誓文  
 諸侯の紛爭  
 諸侯學に向ふ  
 諸侯商賈に負債す  
 紹巴  
 沈惟敬小西行長と和を議す  
 沈惟敬の詐僞現はる  
 鎗武學手段  
 士農衣服の制禁  
 鳥原の教徒兵を擧ぐ  
 鳥原亂徒の敗北  
 信仰試驗の酷刑  
 暹羅の日本人

白河天皇の親政  
 寺院的武力再發して數諸侯に匹敵す  
 寺院の武力を養ひて朝廷に抗す  
 寺院朝廷に迫る  
 社交の發達風流の進歩  
 小黨の滅亡  
 小黨の敗北  
 諸藤光仁天皇の擁立  
 女皇等僧侶政府を作る  
 神佛の混交  
 聖武天皇の奢侈迷信  
 聖武天皇頃大官の所得及人民の負擔  
 持統天皇の治世  
 壬申の亂の結果  
 壬申兩軍の兵勢  
 壬申の亂  
 新羅名分上日本に離畔す  
 新羅百濟日本に離畔す  
 臣下天皇を作る  
 社會的進歩  
 社會の行樂  
 社會の新結合力  
 社會亂離の勢成る  
 社會經濟上の紛亂  
 社會組織變革して國守の權張る

神道の隆盛	六二四	政治漸く變じ藏人檢非違使を生ず	二八	僧侶の殊寵	六〇〇
市府村落を呑む	六四〇	生活風俗の變	三〇	宋學武士の學となる	五七六
市府抑制策	六四四	戰爭地方的となる	四三	壯士の現出	七〇三
市府の發達	六八二	戰亂何故に收まらざるか	四四	尊王攘夷論の現出	七二四
儒佛の争一變して儒林相互の伐となる	六四四	政權下に移る	四九		
上下醉生夢死の時	六五三	政權用人に移る	四七・四六		
士風の三變	六五六	西洋諸國との交通	六二九	たが	
心學	六六八	征明軍の部署	四八五	太古史に現はれたる日本	一
人民の自立	六八二	征韓諸將の不和	五〇	武内宿禰の東夷討伐	三
處士横議の兆	七〇一	關ヶ原の戰	五四	武内族の發達	六
攘夷黨の閉息	七〇三	政治的冒險者の輩出	五六	大化革新前の國狀	一〇九
		折衷學	六七〇	大化の國政變革	一一〇
隋朝との交通	一〇	世子の争	六八	大化革新の主義及票目	一一一
菅原道眞	三三		七四	大化前後國民の生活及思想	一一二
菅原道眞の貶斥	三四	そぞ		大化以來の一大變革	一一三
駿河の今川氏	四七	族長制度の發達	三	大寶令の制定	一一四
		蘇我氏の專横	三六	橘藤原兩氏の玄防と對抗	一一七
世界の二大文明日本に混化す	三	蘇我氏の滅亡	一〇九	男女命名の風一變す	一二九
征戰の危難	三	僧侶の跋扈	一〇一	平清盛の政策	一三〇
姓氏の混亂	三	僧侶政府	一〇九	平清盛死し平氏衰ふ	一三五
生産法制の進歩	三	僧侶政府太政官を呑む	一〇九	大將軍は北方の皇位	一三七
制度益備はる	三	僧侶跋扈して武人を苦しむ	一〇九	武田晴信の人物	一四七
政制の紛亂	三	僧侶盜兵となる	一〇九	武田晴信の軍隊及其政治	一四七
		僧侶再び武力を生ず	一〇九	武田北條今川三氏の同盟	一四七
			一〇九	武田晴信の死	一四七

せ

すず

そぞ

たが

ち

てて

武田氏の滅亡	五〇五	朝鮮抄掠の爲に衰ふ	五〇一	東北諸豪傑臣秀吉に來附す	五七
大侯崛起の運	四九六	朝鮮使節待遇の改題	六三三	唐百濟を滅ぼす	一一九
伊豫政宗の屈服	五七	忠義の風町人の間に生ず	六四	唐との戰	一一三
泰平の空氣徳川秀忠の女を女御とす	五六			土地國有法破る	一一七
男色の少年	六七			道鏡大臣禪師となる	一七六
大農小農を呑む	六四〇			道鏡の人物及地位	一七
田沼意次	六四四	天智天皇の性情	二四	道鏡皇位を望む	一七
田沼意次の外藩授引策	六五九	天智天皇大海皇子と適はず	二六	盜賊蜂起し外敵來らんとす	三六
田沼意次の敗歎	六六九	天武天皇の改革	二五	徳政を生ず	四九
田沼意次の失落	六八三	天武天皇神佛を信ず	二六	徳川家康	四九
竹内式部	六八七	出羽の夷俘清原武衡叛す	二八	徳川家康織田氏に黨し豊臣秀吉と戦ふ	五二
對外策門	七〇三	天下大亂の兆	二九	徳川家康の人物及地位	五〇
脱藩人の輩出	七三	天下鎌倉を謳歌す	三五	徳川家康の敵手	五五
第二の關ヶ原	七四	天皇の御謀叛	三三	徳川家康の擅私	五五
		天皇崩じて葬むるの財なし	七一	徳川家康上杉景勝を攻めんとす	五九
		田制の改革	五八	徳川家康の躊躇	五〇
		天災地變	六三	徳川家康の開府と將軍任	五七
		天明の大飢饉	六三	徳川家康淀君を激發す	五七
		天保の飢饉	六三	徳川家康の法令	五八
				徳川時代の憲法	五八
				徳川家康の一統政略と其功過	五八
				徳川家康の死	五八
				徳川府中の黨争	五八
				徳川家光諸侯を臣とす	五八
				徳川家光の上洛	五八
					五八

とど

徳川武士の氣質 六〇〇  
 徳川時代の生活美術行楽工藝の進歩 六〇二  
 徳川家綱將軍となる 六〇四  
 徳川綱吉の迎立 六〇八  
 徳川綱吉を好む 六二二  
 徳川綱吉時代の學者 六二六  
 徳川綱吉の禁奢令 六三三  
 徳川綱吉の驕奢淫逸 六三三  
 徳川時代の貿易財政の狀態 六三三  
 徳川綱吉の死 六三三  
 徳川家宣立ちて綱吉の非政を改む 六三六  
 徳川家宣の死 六三三  
 徳川吉宗出て家宣の政を破る 六三六  
 徳川吉宗尙武の古風を起さんとす 六三九  
 徳川時代の史學 六四〇  
 徳川時代の和歌 六四〇  
 徳川時代の戲曲 六四七  
 徳川時代の俗歌 六四七  
 徳川吉宗幕府の規模を縮少す 六四九  
 徳川家齊退く 六四九  
 徳川家慶立つ 六五三  
 徳川幕府の自棄 六五三  
 徳川幕府内外政策の矛盾 六五五  
 徳川幕府政策開國に決す 六五七  
 徳川家茂の世子 六五七

徳川家茂將軍となる 七〇〇  
 徳川幕府屈して政權朝廷に歸す 七〇二  
 豊臣秀吉の人物及地位 七〇八  
 豊臣秀吉高松城を取り毛利氏と和す 七二二  
 豊臣秀吉明智光秀を滅ぼす 七二六  
 豊臣秀吉反對黨を滅ぼし天下を取る 七三〇  
 豊臣秀吉關白となる 七三三  
 豊臣秀吉の金配 七三三  
 豊臣氏當時の經濟事情 七三三  
 豊臣秀吉基督教を抑へんとす 七三六  
 豊臣秀吉明を征せんとす 七三六  
 豊臣秀吉子を失ふ 七三六  
 豊臣秀吉外征の議を決す 七三六  
 豊臣秀吉の親軍軍容 七三九  
 豊臣秀吉援兵を發す 七四〇  
 豊臣秀吉兵力不足に泣く 七四〇  
 豊臣秀吉の意氣衰ふ 七四〇  
 豊臣秀頼生る 七四〇  
 豊臣秀次殺さる 七四〇  
 豊臣秀頼淀君の自殺 七四〇  
 東常縁 七四〇  
 外様大名の夷滅 七四〇  
 外様大名自立の志あり 七四〇  
 討幕黨 七四〇

討幕論起る 七五三  
 中大兄皇子中臣鎌足等蘇我氏を滅ぼす 七五三  
 南蠻の歸服 七五三  
 平城遷都 七五三  
 平城時代の文學の發達 七五三  
 平城時代當初の國民思想 七五三  
 平城時代の貴族と寺院平民を壓す 七五三  
 南人の貴族的王朝主義 七五三  
 南人と北人と相對す 七五三  
 南人北人疲勞して新勢力中央諸州に生ず 七五三  
 南人の戀愛思想北人を感化す 七五三  
 南北の武力平均す 七五三  
 南北兩朝の混一 七五三  
 南軍北帝を執ふ 七五三  
 中江藤樹 七五三  
 鍋島侯の不服 七五三  
 日本南島文明の差異ある所以 七五三  
 日本に於ける支那文明の敗北 七五三  
 日本新羅を攻めて大敗す 七五三  
 日本唐と戦ひて敗る 七五三

日本書紀の編纂 一四九  
 日本文學の確定 一六五  
 日本通商條約 七九  
 新田義貞出づ 三九六  
 新田義貞鎌倉を覆す 四〇〇  
 新田義貞足利尊氏を征す 四〇七  
 新田義貞の地位 四〇九  
 新田義貞北國に逃る 四〇八  
 新田義貞の人物 四三〇  
 新田義貞の敗死 四三〇  
 新田義宗の敗死 四三〇  
 日明兩國兵を退く 四三〇  
 内憂の天國 四三〇  
 日米條約の批准 四三〇

始めて租税を收む 一四九  
 華人の背叛 一六五  
 畠山氏將軍を制す 七九  
 畠山細川兩氏の争奪 三九六  
 林羅山 四〇〇  
 林子平 四〇七  
 幕府衰亡の發端 四〇九  
 幕府を危くす 四〇八  
 幕府財政の窮乏 四三〇  
 幕府養子政策 四三〇  
 幕府遂に政權を朝廷に歸す 四三〇  
 禮社の獄 四三〇  
 ハルリス延見の禮 四三〇  
 ハルリスの外交顧問 四三〇

佛敎の渡來 一  
 佛敎の採否進歩保守兩黨の争 一  
 佛敎貴族に行はる 一  
 藤原氏始めて皇室の外戚となる 一  
 藤原氏の權朝野に繁殖す 一  
 藤原氏の隆盛と諸王 一  
 藤原廣嗣の反 一  
 藤原仲麻呂族を壓す 一  
 藤原仲麻呂政體を變革す 一  
 藤原仲麻呂新羅を討たんとす 一  
 藤原百川皇后太子を廢す 一  
 藤原氏遂に大權を握る 一  
 藤原基經陽成帝を廢す 一  
 藤原時平制度の匡正を企つ 一  
 藤原時平の人物及政策 一  
 藤原純友の叛 一  
 藤原兼通圓融天皇に迫り關白を得 一  
 藤原兼家圓融天皇に禪位を迫る 一  
 藤原兼家花山天皇に帝位を捨てしむ 一  
 藤原道長出で藤原氏權空前絶後 一  
 藤原道長三條天皇及太子に讓位を迫る 一  
 藤原泰衡亡ぶ 一  
 藤原康子政治に興る 一  
 藤原惺窩 一  
 風流の進歩 一

八二  
 八五  
 一五三  
 一四六  
 一五一  
 一六六  
 一六八  
 一七二  
 一七三  
 一七四  
 一七五  
 一七六  
 一七八  
 一八六  
 一八六  
 一八七  
 一八八  
 一八九  
 一九〇  
 一九一  
 一九二  
 一九三  
 一九四  
 一九五  
 一九六  
 一九七  
 一九八  
 一九九  
 二〇〇

はば

農民諸侯に反抗す 六五五

武器と帝位を更ゆ 六五五  
 物質的進歩 六五五

はば

武器と帝位を更ゆ 六五五  
 物質的進歩 六五五

はば

武器と帝位を更ゆ 六五五  
 物質的進歩 六五五

はば

武器と帝位を更ゆ 六五五  
 物質的進歩 六五五

はば

武器と帝位を更ゆ 六五五  
 物質的進歩 六五五

福原の遷都  
文武兩黨の争  
武士北條氏の命を奉ぜず  
文教の興隆  
不形儀の改易  
文學の保護  
富力武力を吞む  
譜第制度の缺點  
譜第の微弱  
佛盤琉球に來る  
藤田東湖の人物  
踏繪令の廢止

へへ

邊境の民王化に服せず  
平群族の專權  
平群義へて大伴起る  
兵農區分の發端  
兵農の分別  
平安時代の宗教思想  
平安時代の文學  
平安時代の和歌  
平氏の特性  
平氏に非らざる者人に非ず  
平氏顛覆の陰謀

ほほ

平氏の地位  
平氏富士川に敗る  
平氏寺院を敵とす  
平氏海上の權を執る  
平氏の族滅  
平治の亂  
兵力足らずして豊臣秀吉泣く  
北京の狼狽  
平氏の勢力  
ペルリ開國を迫る  
北狄南蠻の歸服  
北狄韃靼と大舉して叛く  
法制の進歩  
本地垂迹説起る  
北征北人を煽起せしむ  
保元の亂  
保元の亂平治の亂を生ず  
北條時政將軍廢立を謀る  
北條泰時の政治  
北條泰時の死去  
北條經時將軍藤原賴經を廢す  
北條時宗元使を追ふ  
北條氏民心を失ふ

北條高時の失政と驕奢  
北條氏政の降服  
北人の武斷的民政主義  
北人の政治思想は時代の精神  
北軍戰志なし  
北行京軍の困危  
北朝強臣の叛覆  
細川頼之の善政  
細川頼之黜けらる  
細川忠興石田三成の策を破る  
封建成つて平人安んず  
封建の効  
封建下の自治制  
封建内容の崩壞  
封建制度の中心力消滅す  
本多正純放たる  
堀田正俊の重農政策  
堀田正俊殺さる  
堀田正篤出づ  
保科正之  
貿易財政の狀態  
政子と義時  
間部詮房

三〇四  
三〇三  
三〇二  
三〇一  
二九九  
二九八  
二九七  
二九六  
二九五  
二九四  
二九三  
二九二  
二九一  
二九〇  
二八九  
二八八  
二八七  
二八六  
二八五  
二八四  
二八三  
二八二  
二八一  
二八〇  
二七九  
二七八  
二七七  
二七六  
二七五  
二七四  
二七三  
二七二  
二七一  
二七〇  
二六九  
二六八  
二六七  
二六六  
二六五  
二六四  
二六三  
二六二  
二六一  
二六〇  
二五九  
二五八  
二五七  
二五六  
二五五  
二五四  
二五三  
二五二  
二五一  
二五〇  
二四九  
二四八  
二四七  
二四六  
二四五  
二四四  
二四三  
二四二  
二四一  
二四〇  
二三九  
二三八  
二三七  
二三六  
二三五  
二三四  
二三三  
二三二  
二三一  
二三〇  
二二九  
二二八  
二二七  
二二六  
二二五  
二二四  
二二三  
二二二  
二二一  
二二〇  
二一九  
二一八  
二一七  
二一六  
二一五  
二一四  
二一三  
二一二  
二一一  
二一〇  
二〇九  
二〇八  
二〇七  
二〇六  
二〇五  
二〇四  
二〇三  
二〇二  
二〇一  
二〇〇  
一九九  
一九八  
一九七  
一九六  
一九五  
一九四  
一九三  
一九二  
一九一  
一九〇  
一八九  
一八八  
一八七  
一八六  
一八五  
一八四  
一八三  
一八二  
一八一  
一八〇  
一七九  
一七八  
一七七  
一七六  
一七五  
一七四  
一七三  
一七二  
一七一  
一七〇  
一六九  
一六八  
一六七  
一六六  
一六五  
一六四  
一六三  
一六二  
一六一  
一六〇  
一五九  
一五八  
一五七  
一五六  
一五五  
一五四  
一五三  
一五二  
一五一  
一五〇  
一四九  
一四八  
一四七  
一四六  
一四五  
一四四  
一四三  
一四二  
一四一  
一四〇  
一三九  
一三八  
一三七  
一三六  
一三五  
一三四  
一三三  
一三二  
一三一  
一三〇  
一二九  
一二八  
一二七  
一二六  
一二五  
一二四  
一二三  
一二二  
一二一  
一二〇  
一一九  
一一八  
一一七  
一一六  
一一五  
一一四  
一一三  
一一二  
一一一  
一一〇  
一〇九  
一〇八  
一〇七  
一〇六  
一〇五  
一〇四  
一〇三  
一〇二  
一〇一  
一〇〇  
九九  
九八  
九七  
九六  
九五  
九四  
九三  
九二  
九一  
九〇  
八九  
八八  
八七  
八六  
八五  
八四  
八三  
八二  
八一  
八〇  
七九  
七八  
七七  
七六  
七五  
七四  
七三  
七二  
七一  
七〇  
六九  
六八  
六七  
六六  
六五  
六四  
六三  
六二  
六一  
六〇  
五九  
五八  
五七  
五六  
五五  
五四  
五三  
五二  
五一  
五〇  
四九  
四八  
四七  
四六  
四五  
四四  
四三  
四二  
四一  
四〇  
三九  
三八  
三七  
三六  
三五  
三四  
三三  
三二  
三一  
三〇  
二九  
二八  
二七  
二六  
二五  
二四  
二三  
二二  
二一  
二〇  
一九  
一八  
一七  
一六  
一五  
一四  
一三  
一二  
一一  
一〇  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

間部詮房の浪士掃蕩

松平定信

松平定信の復古政策

松平定信の墜落

松平定信と田沼意次との比較

松平信明の執政

み

任那日本に屬す  
任那回復の政策  
源高明源滿仲等廢立を謀る  
源賴政兵を起す  
源賴政の敗死  
源賴朝兵を擧ぐ  
源賴朝鎌倉に據る  
源義仲起る  
源賴朝源義仲と争ふ  
源義仲平氏を追ふ  
源義仲の末路及人物  
源賴朝源義經を除かんとす  
源賴朝寺社公卿と調和す  
源賴朝政制を一變して大權を握る  
源賴朝と大江廣元  
源義經亡ぶ  
源賴朝死し鎌倉の基礎動く

三〇〇

源賴家圍せらる

三浦氏の敗

三好松永の徒將軍義輝を殺す

民戸の武器を収めて大佛を作る

明の國狀

明軍の大敗

明との和議再起す

明の覆亡

明の遣臣授兵を乞ふ

明學の感化

明香の勢力

水戸の學風

水野忠邦出づ

水野忠邦外船擊攘政略

水野忠邦の勤儉政治

水野忠邦の財政改革

水野忠邦の人物と其敗北

陸奥の蝦夷また動亂す

明和の大疫癘

三四四

物部中臣兩氏聯結して蘇我氏と争ふ

物部中臣兩氏の大敗

文武天皇の即位

毛利氏著はる

毛利氏征伐

大和朝廷權力の發達

日本武尊の熊襲征伐

山名氏亡び細川氏榮ゆ

山名細川の二氏大

耶蘇教徒の大迫害

山崎開齋

柳澤吉保の寵任

柳澤吉保文學を保護す

山縣大貳

雄略武烈兩天皇の無限君權

由井正雪

由井正雪敗る

勇進的開國黨

九二

九四

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三

一四三



索引終

呂宋の入貢	五七	和親條約の締結	五三
林于平	五七	和學の研究	五三
李如松平壤を取る	五七	和漢學の狀態	五三
利害の佛教變じて厭世教となる	五七	和議再び起る	五三
兩軍の兵勢	五七	和親の關係	五三
兩皇族相争ふ	五七		
亂離の兆村上天皇の時に現はる	五七		
らつば	五七		
亂民の暴發	五七		
蘭學の起原	五七		
り	五七		
浪人の抱負	五七		
浪人減じて遊俠の徒興る	五七		
浪士外人を襲ふ	五七		
露西亞の勃興	五七		
露西亞東下の歴史	五七		
露人北邊に寇す	五七		
露人對馬を占領す	五七		
露國との交際	五七		
わ	五七		
忘れられたる四百年間の記事	五七		
我軍新羅を攻めて大敗す	五七		
和文の發達	五七		
和田義盛北條氏に反抗して敗る	五七		
和田氏及興長親王の降服	五七		
和寇起つて支那朝鮮を犯す	五七		
よ	五七		
吉田寅次郎の監禁	五七		
淀君の人物	五七		
淀君出づ	五七		
崇	五七		
崇引	五七		
よら	五七		
りる	五七		
れろ	五七		
わ	五七		

大正五年四月一日印刷  
大正五年四月三日發行



發行所

東京市牛込區拂方町  
振替口座四七一〇番

西社

電話番町三一六四番

著作者

竹越與三郎

編輯者

石倉千次

印刷者

中田福三郎

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
株式會社秀英舎第一工場

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地  
三秀舎島連太郎

增補正二千五百年史全  
定價金貳圓五拾錢

竹越與三郎氏著

# 賜天覽南國記

に對する評論一斑

●萬朝報 昨夏著者三又南へ南へ航して船を更ゆること十  
三、道程一萬里と號す、歸來大に南へ！南へ！と叫ぶ此書此呼號の  
よつて來る所を明にす、無路縱橫、副領諸島、乃至佛領印度支那の  
天地自然、人情、政治、躍如として眼前にあり、その忽ち史家たり  
忽ち政治家たる著者の眼光の鋭利なる 此紀行をして天下の珍貴た  
らしむる所以なるが、わけてもその大日本帝國なる一大光明の影が  
是等の地域に於て如何に映するかを觀るに意を拂ひたる痕あるは  
吾人の最も多しまた最も興味ありとする點ならずばあらず歸  
路經來れる臺灣を叙するや、『皇天祝なく唯德之れ助く、余は今後  
我國民が太平洋上に爲さるべからざることを多きを信じ其の時の選  
らざるを信じて疑はず』といひ一轉最後の一章に至つては刻下の  
自然派文學に言及し意思方向目的勢力これを率ゐて意味ある活動  
をなせと斷じ去る如何に意味ある教訓ぞや、吾人は本書の盲目的  
に讀過せざらんことを望まざるを得ず(五月廿五日)

## ●中外商業新報

固より煙霞消閑の餘に成れる者にあ

らす其巡遊には別に目的の存する者ありし也、從つて尋常一様の旅  
行記にあらず觸目の風光、山川、之を網羅し盡さるにあらざるも  
最も重を住民の生活狀態、本國との政治關係、農工商の實情等に置  
き著眼する處凡ならずして世人の參考とす可き點夥なしとせし殊  
に著者は政治的趣味に富むを以て此の方面の觀察頗る確健的確な  
り四百頁に近き大冊讀了して尙ほ飽くを知らざるは全く内容の興  
味あるに因る處亦多く真に著者獨擅にして他人の企及し能はざる  
所と云ふべし(五月廿四日)

## ●國民新聞

水陸一萬里の馬程記にして篇腹の經綸を文章  
と共に發揮し數百の繪圖を添へたり國勢の南進乎北進乎は見る處  
人皆異なれど歴史、地理、文明、政治、風景のあらゆる叙述を打つて  
一丸となし一部の觀光記 渾然として一部の政治史たり、風俗史た  
り、風景史たるは流石に著者獨特の老手(五月廿八日)

## ●日本新聞

其の觀察は却々鋭い、和蘭が東印度諸島に施  
す政策や佛國が印度支那を如何に統治しつゝあるかは紙上麗如た

り、數卷の殖民政策論を讀むよりも本書を通讀すれば直ちに利害得  
失を明にすることが出来る又文章は流暢で厭味が無く之に數十葉  
の寫眞を挿んだのは錦上添花を添ふが如きものがある(五月廿六日)

## ●中央新聞

由あり、水あり、奇獸、怪人到る所に詩趣を  
なし文趣を湛ふ、唯雲水風光の記を以て之を見るも其興味尠少な  
ず、況や著者が輕妙なる筆と卓越せる識見とによりて或論、或記せ  
るをや、題して南國記と云ふも雖實は國家百年の長計を論する  
ものに外ならず(五月三日)

## ●一六新報

文章の流麗は前著歐亞遊記に如す、而も觀察  
の精透は是遙に彼に勝る頗るに時人漸く北守南進の國命なるを認  
識し來る、乃ち南方智識の供給者たる本書の如き端的時代の要求に  
應ずるものと謂可し(牛頭馬頭子)

## ●都新聞

政治家に取りても科學者に取りても文學者に取り  
ても興味ある問題なりとす。本書の内容當に其の言の如し著者が文  
章の雄健流麗なるは既に定評の至するところ添ふるに多數珍奇な  
る寫眞版を以てし其境に遊ぶの感あらしむ、卷末の文學觀また健全  
にして與國の音あり近來出色の好著と謂ふべし(五月十一日)

## ●讀賣新聞

地理、史實の記述に於て尋常人の企及する能  
はざる所あるは云ふに及ばず評論に於ても氏の經世的眼光の偉大  
なるを認むべし此書の出づる蓋し世を益する所尠からざるべし

## ●東京日々新聞

道程一萬里の間關口する所の事細大  
さなく網羅せし上に氏が流暢の筆と奇拔なる觀察とを以てせしが

故臥讀するも面白く學問上に取りて益する所多大なり(五月八日)

## ●東京朝日新聞

三又の觀察、三又の筆致、讀まざるも  
既に内容の如何なるものかを推測し難からず地理の記述史實の考  
證に於て尋常旅行家の企及し能はざる特色あり若夫れ評論の筆に  
至りては到處政治的眼光の閃くを認む(五月一日)

## ●時事新報

徒らに風光を語り習俗を説くに止らず、朝野  
をも殆んど等閑に附したる南國の研究を促がし、夢に數次訪れし彼  
處の新しい知識を吾儕に齎らす誠におおむし事情のゆるす機  
があつて文人の一人乃至數人が彼處に遊びたりて氏の如くかく  
までの事實を齎らすは難いであらう(五月廿一日)

## ●やまと新聞

竹越與三郎氏はその新著「南國記」を本社  
に寄せらる、余輩勿忙之れを披閱し、案を拍つて曰く「是れ彼の維新  
詔勅中の萬里の波濤を開拓すべしとの皇讓を事實上に説明するも  
の即ち南國記也」と、余輩は先づ此點に於て本書の一人も多く邦人  
に讀れんことを切望せざるを得ざる也 藤山氏(六月廿三日言論)

## ●東京日々新聞

此書は著者が昨夏より冬期に懸て東印  
度諸島より、印度支那を経て支那の雲南省を旅行せし時の紀行文  
也、道程一萬餘里の間關口する所の事細大なく、網羅せし上に氏が  
流暢の筆と、奇拔なる觀察とを以てせしが故に臥讀するも面白く、  
又學問上に取りて、益する所多大なり、加ふるに地圖と寫眞とを以  
てせしにより一層感興を深くするを覺ゆ(五月八日)

## ●報知新聞

邦人の耳目には珍らしき山水風俗が目撃する

が如く紙上に躍動せるのみならず著者が獨得の史眼に映じ政治家的眼光を以てせる政治經濟上の觀察と論議とは實に一篇の精神と言ふべく其南へ！南へ！と絶叫する所本著の眼目を明にせるもの全篇を通過して著者經世の文字に接するを得べし(七月四日)

●東京毎日新聞 蘭領東印度諸島、佛領印度支那及ヒ支那東南省に於ける著者の見聞を収録せるもの風景論あり、政治論あり、著者一流の文章を以て其旅行を記する處、他の模倣を許さず(八月一日)

●大阪時事新報 二千五百年史に依りて其の靈犀なる史眼と一種輕快の記述法とを語はしめたる三又竹越與三郎氏は昨夏颯然帝京を出で、蘭領東印度諸島より佛領印度支那を巡遊し南方一帯の國土風俗政治經濟を觀察して歸る「南國記」は即ち其の見聞録なり即ち見聞録なりと雖も眼光八方に透徹して其の由来を察して現在に稽へ將來を斷するところ堂々たる一篇の長論文にして計策の說々々として聞くべきもの、在り小村外相に依りて米國の門路を塞塞されたる我が膨脹的國民は將來に其の足痕を印すべき新らしき運命を與へられたるものとせば胸に一點の望みある者一讀して利するところ少なからざるべし(五月十九日)

●大阪毎日新聞 近時北守南進説の漸く復活し來り熱帯地方が自然の寶庫にして此寶庫を開く者こそ即ち能く富むことを得べく又古來發財たる島國にして大陸に手足を伸すの不利にして徒に衰亡の端緒たるに鑑み朔風吹き荒み凍寒骨に刺する滿洲な

の歡心を得んが爲めにあらゆる方法と手段とを講じつつある間に、突然南國に向つて我國勢の展開を謀れといふが如き、一見奇異なる論議と云はざる可からず、然れども我國は元來南方に向つて進むべきを當然とす(五月廿八日)

●石川新聞 今日南洋の事情を知るは政治家と言はず學者文士と云はず農業者にも極めて必要緊要なる際等は等の好著あるは最有益なるを思ふ且三百七十頁の叙文流暢明快にして挿畫も精巧美麗なれば亦紙價を高からしむるに足らん

●河北新聞 著者が客歲東印度諸島より印度支那及臺灣を巡遊したる事は已に世人の普く知る所本書は即ち其巡遊に依りて得たる見聞集なるが土地の状態、男女の人情、政治の組織等を叙すること頗る密なるものあり南方に注意するもの一讀なるべからず

●北海タイムス 著者は現在の代議士中最も新智識に富める一人にして嘗て雜誌世界の日本を主宰し政論家として一方に雄飛せしは世間の熟知する所なり南國の一端を見歸來此著あり文章は壯麗闊然觀察は奇警周到流石有名のハイカラ氏たる丈ありて徹頭徹尾赤毛布式ならず蓋し紀行文の上乗(五月三十一日)

●小樽新聞 著者竹越三又君客年颯然として南に去る足跡一萬里に達し居るこ五ヶ月にして歸る夫れ南國の地たる雲暖にして綠木空を包み四時花の絶ゆるなく即ち是れ自然の樂園なり茲に國するの不幸にして現代文明の激流に乗ること能はざれば

ごに其勢力を傾注するの愚を學ばず洋々たる太平洋を以て昔が謂招する大經綸を「南へ！南へ！」と題し其胸目の實況を述べて旺んに南方經營の利を説き一入世人の耳識を聳動せしめしが、今や著者の大抱負は一部の冊子として茲に發刊せらるゝに至る、普通片々たる紀行文の類にあらずして一々其經營策の良否を斷じ教訓を與ふるの點に於て推服を禁する能はず、彼の區々たる内、に於ける小事業小競争に醜態を呈し蝸牛角上互に相呑噬するを休めて大に我日本國民の活動を鼓吹奨励せるは喜ぶべし云々(五月廿一日)

●大阪朝日新聞 著者が客年南洋地方より南亞細亞一帯の地方を歴遊せる見聞を録せるもの英佛蘭諸國の植民狀態を研究する好箇の資料なり行文流暢且つ挿畫に珍奇なる數十の寫眞を以てせり(五月二十二日)

●名古屋新聞 上海以南香港、新嘉坡、瓜哇及蘭領諸島、佛領印度支那等を著者が實地に歴遊して打感したる事な例の華麗なる文藻を以て叙述せるもの興味横逸、一讀巻を捲く能はざらむ(六月三日)

●福岡日々新聞 竹越氏の「南國記」……經世的觀察眼に歴史的批評眼を以て兼類し説明したる所、普通の紀行文と大に趣を異にして居る、兵獨特の豊富なる新智識と流麗なる筆致とは往々乾燥なるべき問題をも直ちに詩化し去るが故に全篇約四百頁通讀し來つて感嘆稱賛せざるを得ない、弘田東行氏

●富山日報 國民學つて滿韓の經營に腐心し、當局亦列國

も又自ら特殊の發達をなす廣き意味に於ける人類發達史の最も趣味ある問題に此の間にあり氏は政治家にして史眼を有し經世家にして文筆の技に長ず恐らく是れ此問題の解答として最も任に適せるの一人なるべし今その著を見るに全く所期に背かず目に觸れ耳に響くもの一として意味をなさざるなく政治施設風俗人情宗教教育交通經濟各般を涉りて縱橫無碍或は探勝の客となり或は經國の士となり冒頭先づ人類は南に向つて發展するの傾向を有し日露戰捷の結果は變則なる一時的現象なりと警告し實地の見聞を基礎として盛に南國の經營を鼓吹し談論も發洩も四百頁を埋め説く所概れ肯綮に當る由來我が國現代の風潮は悉く泰西の文物に向ひ近く南隣の國を説くものに至りては多く接見するを得ざりし所氏は先づ先鞭を着けて同時に其後を空しうす又快學たるを失はず卷末結論として文章經國の大業を説く以て氏の抱負と眞意を窺ふに足らん(六月三日)

●静岡新報 竹越氏の南國記は時代の盲目的傾向を警醒し、一代の風氣を南へ南へと轉せしめんことを、北守南進の、南守北進の、南北併進の、これ我が國運を定むべき一大問題なり、文學に志あるもの、政治に志あるもの、歴史に志あるもの、須らくこの書執つて一讀再讀せよ、彼の片々たる銜名の雜著竟に世を益するものなきに比す、豈に玉石の差のみならずや、斗南氏

●北國新聞 巻頭に掲げた「南へ！南へ！」は三百年の迷夢未だ醒めやらざる我國人を喝破して我が大國民が將來活動すべ

き舞臺は實に此の南に在りて北に非ず大陸にあらずして海に在り  
と述べてゐる最後に「經濟の大業、不朽の盛事」と云ふ題目の下に  
實に文學は經濟の大業である」と結論した所なご頗る肯綮に中つて  
ゐる(八月廿一日)

●北陸タイムス 三又一流の才筆にて南洋方面に於ける  
我民族將來の發展地につき著者獨特の燃犀なる詩的政治眼を以て  
觀測したる旅行記にして地理書を兼ね且つ一面最も要領を得たる  
植民政策論なり加ふるに行文流暢にして文學的雅趣に富み最も調  
和し易からざる政治論風土記を巧みに糺傳したるは最も敬服す  
べし爲政者は云までもなく學者教師學生其多方面の讀者に歡迎せ  
らるべき近來の好著なり(十一月廿二日)

●高岡新報 著者の意や深くして悉く解く能はず潤くして  
量られずと雖も按ずるに同胞五千萬が抱へる過去三千年の明史を  
提げ疾く起てよ南國へ、いでや長なへに天與の南雲に基を啓き礎を  
擴飾して大いに宇内に雄飛すべき好機暗送する勿れと覺醒叱咤の  
切意密かに頻りなり痛快なる最近代の絶叫、嗚呼好判希著なる哉  
寶島南國記!! 六尺坊氏(十二月廿七日)

●中央公論 著者の持論たる南進論を熱心に主張したるも  
のにして流弊の文莊重の調、近來或は著者の文章の荒みたるなきか  
を疑ふ輩をしても其判斷の誤たりしを感ぜしむ、序文の如き、三唱  
感嘆に値するの明文也、我國が大陸に伸ぶべき、將た太平洋に伸ぶべ  
きは實は現下の大問題にして、議論紛々として決する所あらざる也

るを想はしむ、富を世界に求むることを知らず、猶額大の東京にッ  
ロウロとして就職難を嘆する者日に多からんとする時、此の如き平天  
下論に接し得たるは、吾等の快心に堪へざる所なりとす(十一月十  
日)

●實業の日本 三又君は北守南進論者である、口に筆に  
堂々として所論を天下に告白してゐる、其態度其識見の時流政治  
家を抜くこと遠きものあるを心づき喜ぶものである、予は南國記  
を讀過して、之は平生の持論に裏書したるものだと思つた南洋の  
旅行記といへば唯それだけでも非常の興味がある、而かも此の書  
は唯の旅行記ではない、政治家的の觀察を、文學的に書いたもの  
である、讀んで面白いはかりでなく讀んでゐるうちに、いろいろ  
のサクセツションを興へられる。近來の快著である(十二月一日)

●太陽 一巻の南國記、之を政治的眼光より見れば經濟の大策  
論たり。之を經濟的眼光より見れば南洋の富源開發の好指針たり。  
之を社會的地理學的眼光より見れば馬來族の國土山川社會の好縮  
圖たり、而して之を文學上の作物として見るも亦紀行文の上乗たる  
もの要するに本書の如く有益にして且多趣味なるは近來稀に見る  
所なりとす(八月一日)

●獨立評論 羅馬へ、羅馬へと云ふ聲は我等の詩情を揺る  
がす、南へ、南へと云ふ聲は我等の興國の靈氣を胸中に跳らせる。  
本書は觀察眼炬の如き竹越君が、多年の宿望であつた南洋諸島巡遊  
記である。曾て二千五百年史を著し所謂史家の文體を破壊したる  
君は、此巡遊記に於て所謂地理書を破壊し手筆縱橫、讀者を  
して思はず君と舟を同ふして神戸を出で多島海の朝霧に島がくれ

角近來希に見る面白くして意味多き著書として江湖に推奨するを  
憚らず(六月一日)

●外交時報 竹越氏は、假へばマコーレーの如し、政治家  
としての氏に服する者も、また服せざる者も、論客としての氏を大  
なりとせざるは、一人もあらざらん、恰いも、このマコーレーが  
國務大臣としてよりも、寧ろエチンホローレビエの寄書家と  
して有名なりしに似たり、氏の「二千五百年史」の如き、これをマコ  
ーレーの「英國史」に比ぶれば、その分量の大きに於て遙かに劣  
り、その批評の正しさに於て遙かに優るに雖も、然かもその着眼  
の奇警にして文辭の雄麗なる點に至ては、兩者その趣を等しうす、  
若し夫れ南國記に至りては、人をして矚が、「マコーレー」ハスチンガ論  
を思はしむ、南國記は、竹越氏自らの序文に從へば、一冊の見聞記  
に過ぎざるが如くなれど、その内容は極東の經營に關する遠大なる  
暗示と植民の實際に關する有益なる論文とに充つ「熱帯を制するも  
のば世界を制す」と説き起して、當今の邦人が、徒らに北方若くは  
四方の研究にのみ踴躍し、支那本土よりも巨大なるマコーレーの富源を  
顧みざることを熱罵し、また臺灣の現状を論じて、政府が海關統  
一なる名の下に臺灣の歳入を掠奪せんとするの愚策なるを説き、政  
府にして臺灣をして母國に獻貢する所あらしめんを欲せば、何んぞ  
臺灣の母國のためにドレッドノート級戦艦を建造せしが如く、臺  
灣の財用を以てその國防力を維持せしむるの方法に出でざるを諷  
ふる所、詞に一代の時論を抜くものあり、氏が識りの尋常にあらず

行く舟を眺め、上海の繁榮を觀、巨濤を突いて關領東印度諸島を巡  
遊し、驕陽に照されつ、佛領印度支那に來り、遂に旅裝を收めて臺  
灣に歸る道程一萬餘里、俄然巻を終つて始めて我は書齋の南國記  
讀者たるを覺えしむ。

著者は日本人の祖先を南洋にありとする一人である、従つて其觀察  
する所も自ら遠い親類を尋ね行く人の様である、殊に著者が最も力  
を入れたのは瓜哇で、實に詳しく調査觀察して居る。

其全般の觀察は政治、經濟、宗教、實業、人情、風俗等あらゆる方面か  
らして居る、地理書としては眞に生命あるもの、紀行文としては活  
動せる經世家の紀行文である、我等はよくも行李匆忙の間に此の如  
く精細に調査研究したるもの也と驚嘆せざるを得ない、殊に多くの寫  
眞版を挿入したれば讀者は身其境にありて研究旅行するの思ある  
べし、南洋諸島研究書として缺くべからざる良書を紹介し、帝王の  
業を爲さんとする海國の青年が本書に依りて南國經營の大業に従  
事せんとする大望を起さん事を熱望する、(七月一日)

●日本及日本人 多數邦人の此に對する知識の頗る乏  
しきの密かに遺憾せられたるに、今ま此等南亞細亞地方の山川  
風光土人の風俗、人情、政治的組織を説く詳密なる本書を得るに依  
りて必要なる知識を多數邦人に供給し得るの好機を得たるは洵に  
國家の爲めに賀すべし

增訂 南國記 特價壹圓廿五錢 郵稅小包金八錢  
發行所 東京牛込拂方町 一一 西 社  
振替四七一〇番

竹越先生 著

# 惜春雜話

に對する新聞  
雜誌評論一斑

●東京日々新聞 竹越三又の文は白馬銀鞍珊瑚の鞭を擧げて長安の大道を行く貴公子の如し徹頭徹尾才人の筆にして文氣映發して光彩自から紙上に躍る其識見文章は確かに當代の文壇に獨歩するの價値あり(八月廿二日)

●中央新聞 「青年は黄金を持たぬ權力を有たぬ閑暇を有たぬ併し乍ら權力を以てすべからず黄金を以て購ふ能はず閑暇も以て易ふべからざる青春と云ふ巨大なる財産を有つてゐる此に於て此の貴重なる青春時代に向ひ滿腔の熱誠を以て其の惜むべきを説き賞ぶべきを訓へ諄々として倦む所なく漢々として盡くるなく眞摯誠實の氣全篇に溢る眞に青年必讀の大文字なり然も文章は例に依つて三又氏一流の快筆之く所可ならざるなく胸膈人目を眩じ精透肌骨に徹す眞に出版界に於ける近來の好産物と云ふべし(八月廿三日)

●東京毎日新聞 惜春雜話といひみぢくも名づけたる

もの哉、著者少旺江湖に名を成したる丈けありて、其の言動今日に至るも絶えて老成人にかぶれたるもの無く、何事にかけても過去を云々するよりも將來に言及するを主とし、青年を相手に血氣に満ちたる議論を試むるを常とす、本書また其の名の示す如く、専ら青年の爲めに縦談横議せるもの、其の譬頭に於て、青春惜む可しと喝破し、以下人生を論じ、戀愛を説き、功名を諷し、英雄を語りて、轉々極まる所を知らざるが如き、世上青年の一讀案を拍つて滑噴するを禁ざざる所なる可し、加ふるに著者の筆、甚だ流麗にして兼れて青年アインバイアするの妙あれば、青年の之を讀む者、誰か恍として酔へるが如きの感をなまじらむ、附録として載する所の國際議院聯合會に臨むの記以下諸篇、孰れも從來の叙事文若くは紀行文文中にありて一美體を爲すもの云ふ可し(八月廿七日)

●國民新聞 竹越氏天下の青年に與へて縦横に現代の社會と道徳を論じ其豐富なる學識と峻逸なる觀察を提げて直に世界の進勢と眞文明の要素眞體を闡明し以て青年の大志を鼓舞し其雄

て進む可き大道の一大炬火たらんを期す文は談話なれども理義明白にして流麗到所譬句に富み平淡の間自ら無限の興味と深切と發明あるは例によつて例の如し極めて時宜を得たるの著者録に漫遊見聞記其他あり國際議院聯合會に臨むの記の如きは觀察の奇警と才機の縦横なるを見る(八月三十日)

●大阪毎日新聞 本書説く所の主意を約説すれば幸ひに生を興國の時を受けて前途春秋に富める我國現代の青年は先づ徐ろに功名心を養ひ多數を幸ひる少數の選民たらんことを期して人生飛鴻の雲上を歩するが如く須らく爪痕を留むることに勉めよ人生の幸福は「何物をも愛し何物かを望み何物かを爲す」にあり心苟も茲にあらば我心常に苦く且樂しく我老ゆるも雖も猶永へに若からんといふにありて青年修養訓の一種なれども其説き方が世間同種の書籍とは全然其性質を異にし酸いも甘いもよく噛み分けた辨なお叔父さんが、若い者に十分同情して世渡りの道を教へるさいふやうな風があつて實際に有益なり(八月三十一日)

●日本新聞 本書亦一の青年訓なるも近來盛に出版せらるゝもの其選を異にするは世の青年訓なるもの多くが殆ど老人の手に成り其説く處恰も老婆の口小言の如く青年をして往々八ヶ間敷家の言なりと忌避せしむるに終るが常なるに本書は著者自ら青年の心を以て青年の尊むべく青春の惜むべき所以を説き青年に對する同情は全幅に流露す世の青年たるもの一度び巻を手にせば天下知己を得たるの感あらん加ふるに三又一流の輕快華麗卷の如

き文章を以てす蓋し青春を語るに最も恰好せるものならん敢て一本書を青年諸子の座右に薦む(九月四日)

●萬朝報 題して惜春雜話といふ、青春の惜むべきを説くに起りて、人生何を以て友とし、何を以て目標とし、何を以て武器とし、何を以て幸福とすべきかを言ふに終る、畢竟著者病間の閑を偷みて平生の抱懐を語るに過ぎずと雖も、言ふ所青年に當り、滋々盡きざるの旨味は以て青年喫緊の藥餌たらしむべし、蓋し著者の思想はこれを洋漢の先人より得來れるもの多く、最も積極的進歩的色彩に富みて、殊に青年者に對する同情と期待との篤きは、今日の先輩中稀に見る所ならずんばあらず、常に功名心を燃焼せしめよ、自敬自信心に不斷の彈力を養へよ、得意冷然、失意淡然、今日主義の上に立ちて、選民たり、天爵的貴族たらんとを理想とせよ、およそ斯の如きは著者の主張の大なるものなるべく、行文朝々比喩適切、吾人は片々たる所謂青年訓書の類を一括抗にし、男子十五歳の讀物として桂月の學生訓を、男子廿歳の讀物として竹越三又氏の『惜春雜話』を存したしと思ふ、附録數章は悉く外遊に關す(二年三月十六日)

●雄辯雜誌 著者竹越氏は、常に若やいな新しい進歩的思想を抱いて、吾れ青年と共に進まんといふ氣概のある立憲的政治家である、此書は氏が病中に著されたもので「青春惜しむべし」を巻頭に於て十八篇、政治的功名心を説き、友情を説き、英雄時

B153

評論一環

代を説きて、青年の心胸をして共鳴せしむらうちに教ふる所甚だ多い、あく迄も青年に同情し、あく迄も現代の時勢を根柢として論ずる所になつかしさがある、其文章は其演説の如く、眼もあやなるばかりに立派である、今の政治家にして此れ程の思想と此程の文とを草しうる人は眞に鮮いであらう、此文によつて道徳及教育に對する進歩的意見をうかがふ事が出来る

頭の空ろな、知識の貧弱な、時勢を知らない、思想の乏しい、而して文章のまづい、ソコラの青年訓的の愚書なぞは一顧だもせずもよい。此書は誠に好著である、一讀して必ず青年の誇りを高めるであらう(九月一日)

●東洋哲學

世の道學先生や成功家が、徒に過去を重んじ未來を重んじたる青年訓を説く時に當つて、これは現在の春を説く「青年の春は惜むべし、人生の春は萬金も亦買ふ能はず、萬牛も止むる能はず然れども唯希望にあらば功名心だにあらば、吾人は永久に春と共にあり、又無限の青春を有するなり」と以下詳々十八項に分ち説く處平淡而も愷切、蓋し近來の快著とす、附録として國際議院聯合會に臨むの記、英國皇帝に謁見の記、北京消息、漫遊記を載す、氏は言論の人又筆の人、才筆流麗、現代思潮に溺るゝの人は取つて以て羅針盤となせ(九月十日)

●日本及日本人

例の青年訓とのみ思ひて竊かに眉を擧めしが、此書を手にして我が思ひの未だ至らざりしを知りぬ。

題目のみを見る、未だ青年訓たるを思ふ。一度び其の一節を讀まんか、詩趣洋溢し明々諦すべきものあるを認む。是れ實に三又が老いの將に至らんとして哀愁禁せず、青年訓に託して自らを傷めるもの、實に一篇の哀詩なり(九月一日)

●實業之日本

此の書は三又氏の口述になれるものにして百餘の事項に亘り丁寧親切に現代の青年に誨ゆ。云ふ所、極めて情味に富み、些の虚偽、誇衒の氣味なし、これ本書が他の青年論、青年訓と異にする所以なり、古人やいもすれば青年を殺し人生の意味を没するに反し三又の遠見よく、これに因はれざるは、嬉し必ず世人の歡迎を受くるならん。(九月十五日號)

●太陽

この書惜春雜話と題すも、見様によつては、一種の青年訓とも見らる可し。戀か家庭か功名かを論じて、現時青年の英雄時代に生れたるを讀し而して自ら進んで道路を發見す可きを説く。字々柳葉の春風に穿ぐむが如く軟かなりも雖も、意は即ち風霜を帯びたり。附録として國際議院聯合會に臨むの記、英國皇帝に謁見の記、北京消息、漫遊見聞記等を添ふ、これ等は候文なれど亦一種の風格を具へ、三又居士の才筆を思慕するものなきにしもあらず惜春雜話は總て言文一致體なり。されど著者の彩筆は遺憾なく露呈され居るを見る。併し文章體なりしならんには、一段の光彩を放つ可きに惜しき事共なり(十一月一日)

▲惜春雜話 定價壹圓貳拾錢 郵稅小包八錢

發行所 東京牛込湯方町 振替四七一〇番 一一 酉 社

終